

普天間飛行場地区埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 25 ~ 27 年度

巡回道路移設工事予定地における埋蔵文化財緊急発掘調査事業

宜野湾古集落

宜野湾シリガーラ流域 古墓群

神山後原丘陵 古墓群

赤道渡呂寒原 古墓群

赤道シキロ一流域 古墓群

普天間飛行場地区埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25～27年度

巡回道路移設工事予定地における埋蔵文化財緊急発掘調査事業

宜野湾古集落
宜野湾シリガーラ流域 古墓群
神山後原丘陵古墓群
赤道渡呂寒原古墓群
赤道シキロー流域 古墓群

2017年（平成29年）3月
沖縄県 宜野湾市教育委員会

序

本報告書は、沖縄防衛局が計画する普天間飛行場内の巡回道路移設工事予定地における埋蔵文化財緊急発掘調査事業に係る開発工事に先立ち、平成 25 年度～平成 27 年度にかけて宜野湾市教育委員会が実施した試掘調査及び緊急発掘調査の成果をまとめたものであります。

巡回道路移設工事予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である赤道渡呂寒原古墓群、神山後原丘陵古墓群、宜野湾シリガーラ流域古墓群、宜野湾古集落などの遺跡の一部を通過するように計画されております。平成 25 年度（繰越）に工事予定地内において遺跡の有無または分布状況等を確認するための試掘調査を実施し、この調査の結果をもとに平成 26・27 年度に緊急発掘調査を行ったところ、近世から近代期における人々の営みの一端を窺うことができました。今回の発掘調査の成果が、調査地周辺の地域における開発行為の事前協議資料等に活用されることはもとより、市民の歴史的教材または文化財の保護・活用資料として活かされ、地域の歴史・文化等の学術資料としてもご活用いただければ幸いです。

末尾になりましたが、調査を実施するにあたりご協力を賜りました沖縄防衛局、また、多大なご指導を賜りました沖縄県教育庁文化財課、並びに貴重なご指導・ご助言を賜りました市文化財保護審議会、字宜野湾郷友会をはじめ、関係各位に対して深く感謝の意を表します。

2017（平成 29）年 3 月

沖縄県 宜野湾市教育委員会
教育長 知念春美



卷頭図版 1 報告書所収遺跡位置



卷頭図版2 フテ 51-C2-ウ 落ち込み状遺構検出



卷頭図版3 フテ 51-E 5-ス 落ち込み検出状



卷頭図版 4 屋敷跡 全景（略東より）



卷頭図版 5 古墓検出状況（平成 26 年度）



卷頭図版6 1地区溝跡確認状況（平成27年度）



卷頭図版7 1地区ピット掘削状況（平成27年度）



卷頭図版 8 2 地区遺物出土状況（平成 27 年度）



卷頭図版 9 2 地区遺構確認状況（平成 27 年度）



卷頭図版 10 3 地区遺構確認状況（平成 27 年度）



卷頭図版 11 3 地区扇子残存状況（平成 27 年度）

例　言

1. 本報告書は、宜野湾市教育委員会が沖縄防衛局の補助を受け、平成 26、27 年度に行った巡回道路移設工事予定地における埋蔵文化財緊急発掘調査の成果を収録したものである。
2. 本書に掲載した地図は、基本的に宜野湾市都市計画課発行の都市計画図(1:2,500)を使用しており、他の情報図については、宜野湾市教育委員会が管理・運営している GIS データを主に使用している。
3. 発掘調査並びに本文中における遺跡の基準方位は、国土座標系(旧座標系)第 X V 座標系の座標北を用い、層位・遺構は海拔高(那覇)を基準とした高さである。
4. 本書で使用した土色は、農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
5. 本書の執筆分担は下記の通りで、デジタルデータ編集は杉村、翁長の協力を得て、長濱が行った。

第 I 章～第 III 章、第 IV 章 第 2 節、第 V 章、第 VI 章……………長濱 健起
第 IV 章 第 1 節、第 3 節、第 V 章……………池原 悠貴

6. 現地調査で得られた実測図・写真・画像デジタルデータ・地形測量図等の各種調査記録は、全て宜野湾市教育委員会文化課に保管している。

目 次

序

巻頭図版

例言

第Ⅰ章 宜野湾市の位置と環境	1	
第1節 地理的環境	1	
第2節 普天間飛行場の概要	2	
第3節 普天間飛行場基地内の埋蔵文化財	4	
 第Ⅱ章 事業概要		
第1節 調査に至る経緯	9	
第2節 調査体制	9	
 第Ⅲ章 調査方法		12
第1節 試掘調査の前に	12	
第2節 調査区の設定	12	
第3節 調査方法	14	
第4節 調査経過	16	
 第Ⅳ章 試掘調査報告		18
第1節 敷地分析と周知の遺跡	18	
第2節 基本層序	20	
第3節 調査の概要	22	
 第Ⅴ章 本調査の成果		26
第1節 平成 26 年度調査	26	
第2節 平成 27 年度調査	53	
 第VI章 結語		73
参考・引用文献	74	
報告書抄録		

卷頭図版

卷頭図版 1	報告書所収調査位置	卷頭図版 7	1地区ピット掘削状況（平成27年度）
卷頭図版 2	フテ51-C2-ウ 落ち込み状遺構検出	卷頭図版 8	2地区遺物出土状況（平成27年度）
卷頭図版 3	フテ51-E 5-ス 落ち込み検出状	卷頭図版 9	2地区遺構確認状況（平成27年度）
卷頭図版 4	屋敷跡 全景（略東より）	卷頭図版10	3地区遺構確認状況（平成27年度）
卷頭図版 5	古墓検出状況（平成26年度）	卷頭図版11	3地区厨子残存状況（平成27年度）
卷頭図版 6	1地区溝跡確認状況（平成27年度）		

挿図目次

第I - 1図	宜野湾市の位置図	1	第V - 11図	3号墓：断面見通し図・平面図・ 墓室断面・セクション図	39
第I - 2図	宜野湾市地形分類図	3	第V - 12図	平成26年度出土遺物 1	42
第I - 3図	宜野湾市の文化財分布図	7	第V - 13図	平成26年度出土遺物 2	44
第III - 1図	普天間飛行場基地内試掘・確認調査 フローチャート	12	第V - 14図	調査区位置図	54
第III - 2図	普天間飛行場基地内グリッド設定図	13	第V - 15図	1区-1～5平面図	56
第IV - 1図	巡回道路位置図および周辺遺跡分布図	18	第V - 16図	1区-6～8平面図	56
第IV - 2図	試掘坑平面図	19	第V - 17図	2区-1 平面図	57
第IV - 3図	基本層序（合成画像柱状図）	20	第V - 18図	2区-2 平面図	57
第IV - 4-1図	試掘坑断面図①	22	第V - 19図	2区-3～4 平面図	58
第IV - 4-2図	試掘坑平面図①	23	第V - 20図	2区-5 平面図	59
第IV - 5図	試掘坑断面図・平面図②	23	第V - 21図	3区64号墓 立面図・平面図	60
第IV - 6図	試掘坑断面図・平面図③	24	第V - 22図	1区-1・1区-2 壁面土層図	61
第IV - 7図	試掘坑断面図・平面図④	25	第V - 23図	1区-4集石平面図・土層図	62
第V - 1図	巡回道路周辺遺跡分布図	27	第V - 24図	2区-1 壁面土層図	63
第V - 2図	トレーンチ配置図	27	第V - 25図	2区-1 S014・15断面図	64
第V - 3図	家屋部平面図	29	第V - 26図	2区-2北 SO03平面図	65
第V - 4図	トレーンチ断面図①	30	第V - 27図	2区-2北 SO03断面図	65
第V - 5図	トレーンチ断面図②	31	第V - 28図	2区-5 S017・S018 平面図	66
第V - 6図	トレーンチ断面図③	32	第V - 29図	2区-5 S017・S018 断面図	66
第V - 7図	トレーンチ断面図④	33	第V - 30図	遺物構成グラフ	67
第V - 8図	トレーンチNo19 石積み遺構平面図	35	第V - 31図	平成27年度出土遺物	68
第V - 9図	トレーンチNo29 石敷き遺構平面図	36			
第V - 10図	1号墓：断面見通し図・平面図・ 墓室断面・セクション図	38			

図版目次

図版I - 1	米軍による普天間飛行場の建設	2	図版V - 1	家屋部平面オルソ	29
図版I - 2	平成14年 宜野湾市全景	2	図版V - 2	トレーンチNo19 石積み遺構オルソ	35
図版I - 3	昭和20年 宜野湾市全景	3	図版V - 3	トレーンチNo29 石敷き遺構オルソ	36
図版I - 4	普天間飛行場基地内の主な文化財	5	図版V - 4	平成26年度出土遺物 1	43
図版III - 1	試掘調査作業イメージ	15	図版V - 5	平成26年度出土遺物 2	45
図版III - 2	作業状況	16	図版V - 6	平成27年度出土遺物	68
図版III - 3	作業状況	17			

挿表目次

第I - 1表 宜野湾市の文化財一覧	6	第V - 12表 円盤状製品集計表	51
第I - 2表 普天間飛行場基地内遺跡一覧	8	第V - 13表 ガラス製品集計表	51
第IV - 1表 基本層序の土色一覧	20	第V - 14表 平成27年度出土遺物観察一覧	67
第V - 1表 平成26年度出土遺物観察一覧	41	第V - 15-1表 沖縄産施釉陶器集計表1	69
第V - 2表 白磁集計表	46	第V - 15-2表 沖縄産施釉陶器集計表2	70
第V - 3表 本土産陶器集計表	46	第V - 16表 先史集計表	71
第V - 4表 本土産陶器?集計表	46	第V - 17表 青花集計表	71
第V - 5表 本土産磁器集計表	47	第V - 18表 本土産陶器集計表	71
第V - 6表 沖縄産無釉陶器集計表	48	第V - 19表 本土産磁器集計表	71
第V - 7-1表 沖縄産施釉陶器集計表1	49	第V - 20表 アカムヌー集計表	71
第V - 7-2表 沖縄産施釉陶器集計表2	50	第V - 21表 銀貨集計表	71
第V - 8表 アカムヌー集計表	51	第V - 22表 瓦集計表	71
第V - 9表 石器・石製品集計表	51	第V - 23表 沖縄産無釉陶器集計表	71
第V - 10表 瓦集計表	51	第V - 24表 平成26年度 基本層序	72
第V - 11表 レンガ集計表	51		

第Ⅰ章 宜野湾市の位置と環境

第1節 地理的環境

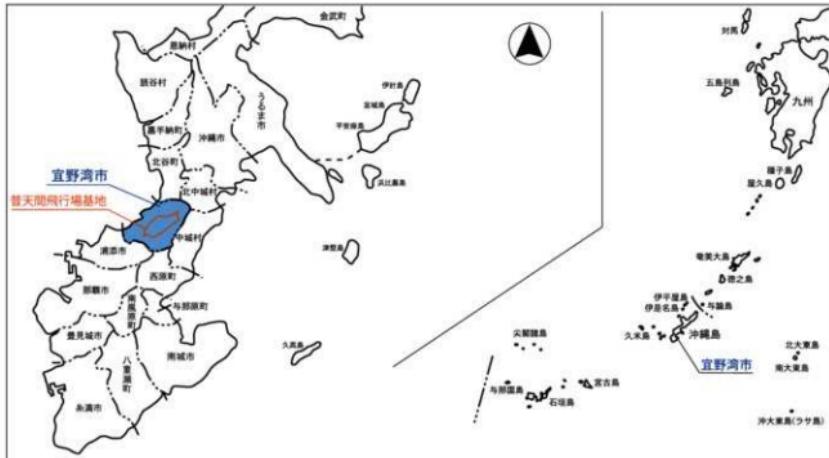
宜野湾市は、沖縄本島中部の西海岸にあって、東シナ海に面し、北谷町・北中城村・中城村・西原町・浦添市に隣接する。総面積は19.80 km²を測り、略東西6.1 km・略南北5.2 kmの略長方形を成す。市域北西にはキャンプ瑞慶覧、中央には普天間飛行場基地が占有し、市民は飛行場基地を廻る外縁を居住域とする。基地は、本市における地目の32.4%を占める（2012年現在）。これは、本市地目にあたる民間の宅地に次ぐ広さである。

本市の地形は、起伏の小さい丘陵と琉球石灰岩で構成される台地や低地から成り、台地にはカルスト地形が発達する。特に、平地面を形成する台地が最も発達しており、埋立地を除く市域面積の3分の2を占める。市域の台地は海岸段丘であり、海岸から内陸に向かって離壇状を呈する4つの段丘から成るが、市域西侧と東側で様相が異なり、西側は西海岸へと緩やかに傾斜する3つの段丘面から成り立つ海岸段丘と、それに連続する海岸低地が広がり、東側はこれとは対照的に開拓の進んだ丘陵地が展開する（第Ⅰ-2図）。

沖縄県の海岸段丘は、高位段丘・中位段丘・低位段丘に区分されており、市域の段丘は中位段丘と低位段丘で構成される。『宜野湾市史』第9巻では、さらにこれらを下位面と上位面で区別している。

低位段丘下位面（第1面）は、比屋良川の河口右岸から宇地泊・真志喜・大山・伊佐に連なる標高3～30 mの海岸低地である。低位段丘上位面（第2面）は、標高30～40 mの石灰岩段丘で、大山・真志喜・宇地泊・伊佐の住宅地が密集する。中位段丘下位面（第3面）は、キャンプ瑞慶覧から普天間飛行場基地へと延びる標高50～90 mの石灰岩段丘である。中位段丘上位面（第4面）は、標高90 m以上の高位置にあり、我如古から野嵩に至る国道330号線の西方から東へ分布する。赤道から宜野湾にかけて展開する緑地帯がその代表である。

内陸側の3つの段丘面（第2面～第4面）は、大半が琉球石灰岩部層で成り立つ。この琉球石灰岩部層の段丘縁には洞穴と湧水が点在し、本市の自然及び人文的景観の特徴となっている。河川は、浦添市・西原町との境に比屋良川、北谷町・北中城村・中城村との境に普天間川が流れる。



第Ⅰ-1図 宜野湾市の位置

第2節 普天間飛行場の概要

普天間飛行場基地の成り立ちは、1945年に米軍占領とともに接收され、本土決戦に備えて米陸軍工兵隊が滑走路を建設したことに始まる。当該地域に所在した宜野湾旧集落や神山旧集落、新城旧集落、そして各屋取集落は収用され、住民は居住区の移転を強制された。1950年代になると、朝鮮戦争を背景として沖縄の戦略的重要性が認識され、基地強化の政策が執られて拡張工事が行われるようになった。こうして、大規模な土地造成が繰り返されるようになる。1960年には海兵隊施設に移管されて海兵隊航空基地として使用が開始された。日本復帰後は、普天間海兵隊飛行場・普天間陸軍補助施設・普天間飛行場通信所の3施設が統合されて普天間飛行場となった。現在では長さ2,800m、幅46mの滑走路を有し、在日米軍基地の中でも岩国基地と並ぶ有数のヘリコプター部隊の拠点となっている。

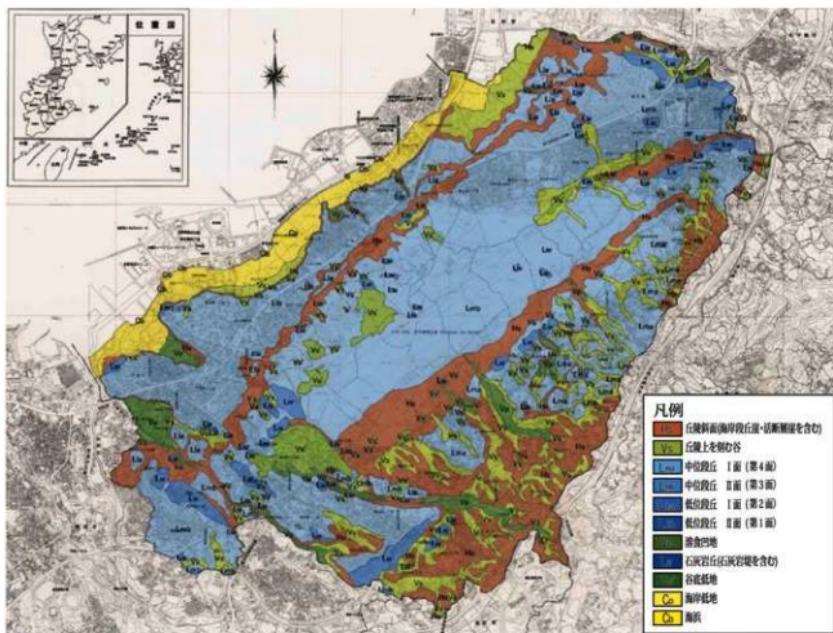
普天間飛行場基地は本市のほぼ中央に位置しており、市域21字のうちの13字に跨る広い範囲を占める。この場所は、市域で最も広い段丘面（第3段丘面）となっており、このほぼ全域を占有する。面積は480.6haで、市域の約25%の広さに相当する。また、民間地域を強制的に接收して建設されたため、その約90%が私有地であり、約3,000人の地権者が存在する。この大規模な飛行場が住宅地に隣接した場所に位置するため、交通の便を悪くさせるなど、効率的な街作りを進める上で阻害要因ともなっていることはもとより、しばしば「世界一危険な飛行場」とも呼ばれ、墜落事故の危険性をはらんでいる。そのため、平成8年12月の「沖縄に関する特別行動委員会」（SACO）の最終報告で、代替施設の県内移設などを条件に普天間飛行場の全面返還が合意された。



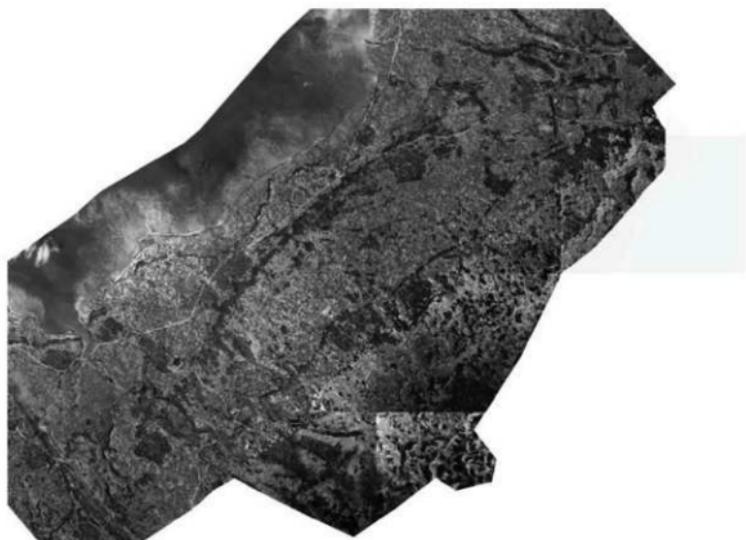
図版I-1 米軍による普天間飛行場の建設



図版I-2 平成14年 宜野湾市全景 ※中央が普天間飛行場



第I-2図 宜野湾市地形分類図



図版I-3 昭和20年 宜野湾市全景

第3節 普天間飛行場基地内の埋蔵文化財

宜野湾市教育委員会が、これまでに普天間飛行場基地内において実施してきた各種文化財調査の結果、平成25年3月現在で、同基地内には105箇所の埋蔵文化財が確認されており、その周知が図られている（沖縄県教育庁文化課編 2010 宜野湾市教育委員会 2014）。

代表的な遺跡としては、野嵩タマタ原遺跡・新城古集落遺跡・喜友名アジミー洞穴遺跡・伊佐上原遺跡群・大山岳之佐久原洞穴遺跡・大山岳之佐久原第一・第二遺跡・真志喜富盛原第一遺跡・宜野湾クシヌウタキ遺跡・神山マーカー遺跡・神山ウクマバカ洞穴遺跡・神山テラガマ洞穴遺跡・宜野湾・神山シリガーラ流域古墓群・赤道渡呂寒原洞穴遺跡・上原遺跡・上原瀧原遺跡が挙げられる。中でも上原瀧原遺跡は、畝真状の溝が複数検出されており、遺構の状態や遺構覆土の自然化学分析調査の結果から、日本最古の原始農耕的な生産遺跡の可能性があるとされており、特に注目される遺跡である。また、平成16年度に調査が行われた神山テラガマ洞穴遺跡では、過去に沖縄のロゼッタストーンとも称される“線刻石板”が発見された興味深い遺跡である。なお、平成13年度から平成16年度にかけて実施された試掘調査や那覇防衛施設局や在沖米軍海兵隊の文化財の有無照会に係る試掘調査などにより、あらたに追加された遺跡は、新城東原遺跡（旧称上原東原遺跡）・上原仲毛原遺跡・中原同原遺跡・喜友名東原第四遺跡・喜友名前原第五遺跡・神山黒数原第一遺跡・同第二遺跡・大山岳之佐久原第四遺跡・大山加良当原第三遺跡・同第四遺跡・同第五遺跡・大山勢頭原第四遺跡・同第五遺跡・大山大久保原遺跡・宜野湾東原遺跡・宜野湾前原第一遺跡・同第二遺跡・佐真下同原遺跡・佐真下西原遺跡の19が挙げられる。また、平成18年度に行われた踏査によって、伊佐上原第二古墓群・大山岳之佐久原古墓群の2遺跡が新たに確認された。

確認されている埋蔵文化財を時期的に見た場合、貝塚時代前期・中期・後期・グスク時代・古琉球・近世琉球・近代～基地接收以前へと時系列的な連続を見せながら、古代より居住地域として適していたことが窺い知れる。遺跡の性格としては、貝塚・古集落跡・生産遺跡・遺物散布地が挙げられる。また、埋蔵文化財以外にも、・拝所・湧泉・洞穴・古墓群・古闘牛場跡なども確認されている。

そのほかに、戦後の基地接收以前の原地形が比較的良好な状態で残されている地域についても確認されている。しかしながら、その多くが基地建設・拡張や度重なる施設増改築の際に、大規模な土地造成が繰り返されており、接收以前の地形や植生は大きく改変されている状況である。改変以前の地形の状況については、旧日本軍陸軍參謀本部測量部作成地形図や米軍作成の地形図等により見て取れるほか、土地利用状況についても戦前の米軍撮影による空中写真や土地利用台帳などにより把握することができるのみである。このような状況から、多くの貴重な文化財が消失したものと考えられるが、基地内での開発から免れて、作戦エリア外に緑地帯として残されている地域や、基地造成が盛土によってなされた場所、基地縁辺部の段丘崖、迫地や開析谷地内の谷底低地、湾入・起伏が著しい小河川などの地域については、埋蔵文化財やその他の文化財が良好な状態で保存されていることも予想されている。

現在機能している滑走路部分や既存施設等が敷設されている作戦エリア内及びフライトイゾーンに面した地域、作戦エリアイア外の黙認耕作地等についても、その大部分の地域が未調査となっている状況であるため、基地内での開発行為や今後に予想される基地返還後の大規模開発に伴う各種文化財の遺跡が確認されることも容易に予測できると言える。また、普天間飛行場基地外の周縁部地域においても、貝塚時代前期・中期・後期や古琉球以降の各時期に相当する遺跡が密集して分布している状況にあり、普天間飛行場基地内及びキャンプ瑞慶賀と市内民間地域を含めた宜野湾市内全域で確認されている埋蔵文化財の総数も323箇所を数えている。



上原瀧原遺跡



上原瀧原遺跡



野嵩タマタ原遺跡



野嵩タマタ原遺跡



宜野湊クシヌタキ



赤道屋取古集落跡



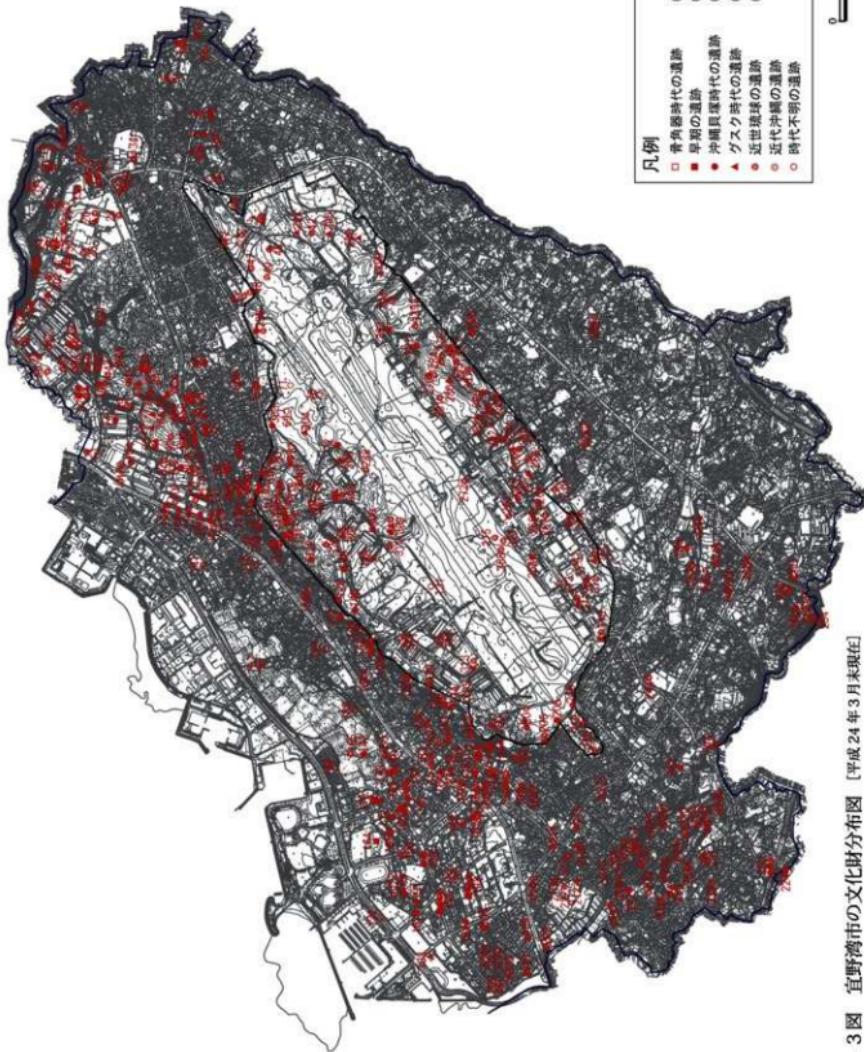
神山テラガマ遺跡



神山テラガマ遺跡出土 線刻石板

図版 I - 4 普天間飛行場基地内の主な文化財

第I-1表 宜野湾市の文化財一覧



第I-3図 宜野湾市の文化財分布図 [平成24年3月末現在]

第I-2表 普天間飛行場基地内遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	種別	遺跡番号	遺跡名	種別
2	野嵩タマタ原遺跡	生産	263	宜野湾サクヌカー	湧泉・拌所
12	野嵩長迫原古墓群	墓地	264	宜野湾メースカー	湧泉・拌所
38	新城原石器散布地	散布地	265	宜野湾馬場跡	馬場跡
40	新城古集落	集落跡	266	宜野湾メースウタキ遺跡	祭祀
42	新城シマヌカー	湧泉・拌所	267	宜野湾ウタキグワー遺跡	祭祀
46	新城ウイーヌ毛遺跡	祭祀	268	宜野湾トゥン遺跡	祭祀
47	新城トゥン遺跡	祭祀	271	宜野湾ノロ殿内遺跡	祭祀
68	喜友名前原第二遺跡	集落跡	272	宜野湾シリガーラ流域古墓群	墓地
69	喜友名前原第三遺跡	生産	273	宜野湾大吹原遺跡	生産
70	喜友名東原第二遺跡	不明	274	宜野湾カニクエーウマヌヤー跡	鍛冶?
71	喜友名東原第三遺跡	生産	275	宜野湾間切番所跡	番所跡
72	喜友名アジミー洞穴遺跡	貝塚・洞穴	276	神山マーカー遺跡	散布地
80	喜友名ウフシー遺跡	散布地	277	神山ウクマバカ洞穴遺跡	洞穴・墓地
81	喜友名前原第四遺跡	集落跡	278	神山カンミン遺跡	散布地
87	喜友名前原第二古墓群	墓地	279	神山トゥン遺跡	集落・祭祀
93	伊佐上原遺跡群A地点	集落跡	280	神山同原遺跡	生産
98	伊佐上原遺跡群F地点	集落跡	281	神山古集落	集落跡
100	伊佐上原遺跡群H地点	不明	282	神山メヌカー	湧泉・拌所
101	伊佐ケレンケレンガマ洞穴遺跡	洞穴・戦跡	283	神山クシヌカー	湧泉・拌所
102	伊佐上原東方遺跡	散布地	284	神山後原ウシナ一跡	闢牛場
118	伊佐上原第一古墓群	墓地	285	神山テラガマ洞穴遺跡	洞穴・祭祀
120	大山岳之佐久原第一洞穴遺跡	墓地・戦跡	286	神山カンミンヌウタキ遺跡	祭祀
121	大山岳之佐久原第一遺跡	生産	287	神山後原丘陵古墓群	墓地
122	大山岳之佐久原第二遺跡	散布地	288	神山黒数原古墓群	墓地
123	大山岳之佐久原第三遺跡	不明	291	赤道渡呂寒原洞穴遺跡	洞穴・墓地
124	大山加良当原第一遺跡	不明	292	赤道渡呂寒原屋取古集落	集落跡
126	大山ウフォーアブ遺物散布地	洞穴遺跡	293	赤道渡呂寒原古墓群	墓地
127	大山茅久保原第一遺跡	貝塚	294	赤道シキヨーラ流域古墓群	墓地
128	大山茅久保原第三遺跡	不明	295	上原同原遺跡	生産
129	大山勢頭原第一遺跡	散布地	296	上原濡原遺跡	生産
130	大山勢頭原第二遺跡	集落・墓地	297	新城東原遺跡	集落跡
131	大山勢頭原第三遺跡	生産	298	上原仲毛原遺跡	生産
132	大山富盛原第一遺跡	散布地	299	中原同原遺跡	生産
135	大山富盛原第三遺跡	散布地	303	喜友名東原第四遺跡	散布地
145	大山茅久保原第二遺跡	集落跡	304	喜友名東原第五遺跡	不明
146	大山チャシグスク遺跡	集落跡	305	神山黒数原第一遺跡	不明
156	大山東方丘陵古墓群	墓地	306	神山黒数原第二遺跡	生産
159	真志喜富盛原第三遺跡	散布地	307	大山岳之佐久原第四遺跡	不明
174	真志喜製立原遺跡	散布地	308	大山加良当原第三遺跡	不明
204	大謝名軍花原第一遺跡	散布・生産	309	大山加良当原第四遺跡	生産
205	大謝名久永地原遺物散布地	散布地	310	大山加良当原第五遺跡	不明
206	大謝名軍花原第二遺跡	散布・生産	311	大山勢頭原第四遺跡	不明
218	大謝名軍花原古墓群	墓地	312	大山勢頭原第五遺跡	不明
219	大謝名久永地原第一古墓群	墓地	313	大山久保原遺跡	不明
220	大謝名久永地原第二古墓群	墓地	314	宜野湾東原遺跡	不明
257	宜野湾前原第一遺物散布地	散布地	315	宜野湾前原第一遺跡	生産
258	宜野湾前原第二遺物散布地	散布地	316	宜野湾前原第二遺跡	生産
259	宜野湾クシヌウタキ遺跡	集落・祭祀	317	佐真下同原遺跡	生産
260	宜野湾後原遺物散布地	散布地	318	佐真下西原遺跡	生産
261	宜野湾古集落	集落跡	319	伊佐上原第二古墓群	墓地
262	宜野湾ヌールガー	湧泉・拌所	320	大山岳之佐久原古墓群	墓地

第Ⅱ章 事業概要

第1節 調査に至る経緯

巡回道路移設工事予定地における埋蔵文化財緊急発掘調査事業（以下、当該事業）は、市道宜野湾11号道路整備事業（以下、宜野湾11号整備事業）に伴うものである。宜野湾11号整備事業は、国道330号の補完及び地域内における交通量緩和や地域住民の生活環境の改善が目的とされた。その経緯は、昭和54年度に普天間飛行場（以下、飛行場）周辺補償事業として事業採択がなされたことによって始まり、その後事業は断続的に進捗する。平成8年3月に日米合同委員会（SACO）において、飛行場内における既存巡回道路等の移設を条件とした飛行場東側沿いの土地返還の承認がなされたが、同年12月のSACO最終報告で飛行場の全面返還が合意されたことに伴い、東側沿いの土地返還に係る事業は中断した。平成14年度に宜野湾市より那覇防衛施設局に対し、宜野湾11号道路整備事業の促進等を要請し、平成17年度には、宜野湾11号整備は当該地の返還ありきであり、既存巡回道路移設が完了した後に返還となる旨の調整がなされた。その後、道路線形等を検討し、平成25年度には宜野湾市教育委員会と沖縄防衛局で「普天間飛行場（東側沿い土地）の返還に伴う工作物移設予定地区埋蔵文化財に関する協定書」を締結した。それ以降は、年度ごとに埋蔵文化財発掘調査の依頼を受け、それらに関する事務手続き等を経たうえで現地における発掘調査を実施するに至った。

第2節 調査体制

巡回道路移設工事予定地における埋蔵文化財緊急発掘調査は平成26、27年度に実施し、資料整理及び報告書作成に係る整理業務は平成27、28年度に実施した。その調査体制は下記のとおりである。

事業主体	沖縄県宜野湾市教育委員会	
事業責任者	教育長	玉城 勝秀（平成25～27年度） 知念 春美（平成28年度）
事業総括	教育部 教育部長	玉那朝 清（平成25年度） 宮城 光徳（平成26年度） 島袋 清松（平成27～28年度） 伊佐 徳光（平成25年度） 島袋 清松（平成26年度） 伊佐 英明（平成27～28年度）
	" "	呉屋 義勝（平成25年度） 與那原 類（平成26～27年度） 比嘉 洋（平成28年度）
事業事務	文化財保護係長	森田 直哉（平成25～26年度） 吉村 純（平成27～28年度） 担当主査 仲村 健（平成25年度） 文化財保護係主任主事 長濱 健起（平成28年度）

	文化課 文化財保護係主任主事	長濱 健起 (平成 25 ~ 27 年度)
	" " "	仲村 賀 (平成 26 ~ 27 年度)
調査業務	" 文化財保護係長	森田 直哉 (平成 25 ~ 26 年度)
	" " 主事	長濱 健起 (平成 25 ~ 27 年度)
	" " "	仲村 賀 (平成 26 ~ 27 年度)
	" 文化財保護係 嘴託員	池原 悠貴 (平成 26 ~ 27 年度)
資料整理業務	" 文化財保護係主任主事	長濱 健起 (平成 28 年度)
	" " "	長濱 健起 (平成 26 ~ 27 年度)
	" 文化財保護係 嘴託員	池原 悠貴 (平成 26 ~ 28 年度)
	" " "	奥間 陽子 (平成 26 年度)
	" " "	古謝 和美 (平成 27 年度)

委託業務

平成 25 年度 (繰越)

	自然科学分析業務委託①	パリノ・サーヴェイ(株)
	試掘坑設定業務委託	(有)琉測コンサルタント
	磁気探査業務委託	(株)ニーズ・エンジニアリング
	発掘調査支援業務委託	(株)アーキオバシフィック支店
	自然科学分析業務委託②	パリノ・サーヴェイ(株)
	草木搬出・処理業務委託	松竹重機
平成 26 年度	発掘調査支援業務委託	(株)バスコ沖縄支店
平成 27 年度	磁気探査業務委託	(株)ニーズ・エンジニアリング
	発掘調査支援業務委託	(株)埋蔵文化財ポートシステム沖縄支店
	自然科学分析業務委託	パリノ・サーヴェイ(株)
	草木搬出・処理業務委託	松竹重機

調査指導および調査協力 (職名等は現在)

調査指導及び調査協力として下記の方々に指導・協力をいただいた。

宇宜野湾郷友会

字神山郷友会

與那覇政之 (米海兵隊環境保全課)

Nick Chamberlain (米海兵隊環境保全課)

Robert B Peterson (当時米海兵隊環境保全課)

大澤 良行 (沖縄防衛局企画部)

松田 安広 (当時沖縄防衛局企画部)

北岡 亮 (当時沖縄防衛局企画部)

泉 秀雄 (当時沖縄防衛局企画部)

小濱 敏賢 (沖縄防衛局企画部)

垣花 恵顯（當時沖縄防衛局企画部）
屋宜 宣広（沖縄防衛局企画部）
赤嶺 正和（當時沖縄防衛局企画部）
仲宗根彩乃（沖縄防衛局企画部）
福山 寛乃（當時沖縄防衛局企画部）
目差 茜（當時沖縄防衛局企画部）
江藤 正典（沖縄防衛局調達部）
齊藤 進一（當時沖縄防衛局調達部）
浅野 啓介（当時文化庁記念物課）
上地 博（沖縄県教育庁）
中山 晋（沖縄県教育庁）
知念 隆博（沖縄県教育庁）
羽方 誠（沖縄県教育庁）
田場 直樹（沖縄県教育庁）
金城 亀信（沖縄県立埋蔵文化財センター）
盛本 敦（當時沖縄県立埋蔵文化財センター）
島袋 洋（當時沖縄県立埋蔵文化財センター）
山本 正昭（沖縄県立埋蔵文化財センター）
瀬戸 哲也（沖縄県立埋蔵文化財センター）
新垣 力（沖縄県立埋蔵文化財センター）
大堀 皓平（沖縄県立埋蔵文化財センター）
宮城 淳一（沖縄県立埋蔵文化財センター）
比嘉 悅子（沖縄県立芸術大学 非常勤講師）宜野湾市文化財保護審議会 会長
池田 榮史（琉球大学法文学部 教授）宜野湾市文化財保護審議会 副会長
赤嶺 政信（琉球大学法文学部 教授）宜野湾市文化財保護審議会 委員
新垣 義夫（普天満宮司）宜野湾市文化財保護審議会 委員
大城 逸朗（おきなわ石の会 会長）宜野湾市文化財保護審議会 委員
恩河 尚（沖縄国際大学 非常勤講師）宜野湾市文化財保護審議会 委員
崎浜 靖（沖縄国際大学経済学部 教授）宜野湾市文化財保護審議会 委員
嵩元 政秀（沖縄考古学会 元会長）宜野湾市文化財保護審議会 委員
波平エリ子（沖縄国際大学 非常勤講師）宜野湾市文化財保護審議会 委員
福島 駿介（琉球大学工学部 名誉教授）宜野湾市文化財保護審議会 委員
宮城 邦治（沖縄国際大学法文学部 名誉教授）
屋比久千江美（宜野湾市教育委員会）
西銘 五月（宜野湾市教育委員会）

第Ⅲ章 調査方法

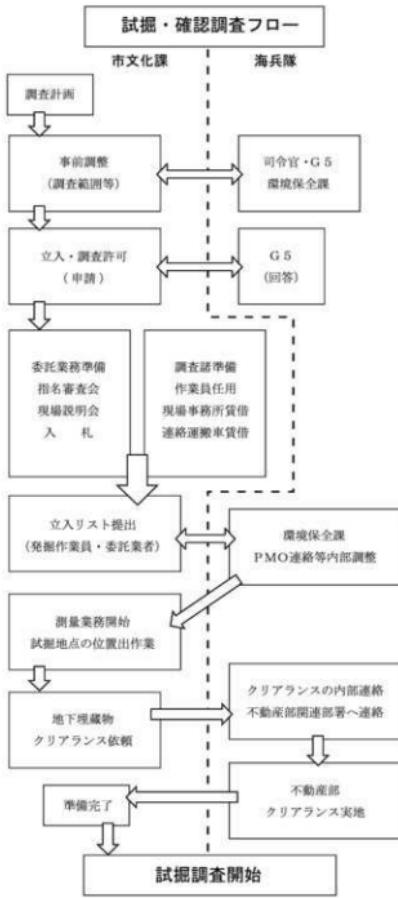
第1節 試掘調査の前に

基地内遺跡ほか発掘調査事業は、大規模な開発が予想される普天間飛行場基地内の埋蔵文化財の所在・範囲・性格を明らかにするために、試掘・確認調査を実施し、当該地域における埋蔵文化財の保存のための資料を作成することを大きな目的としている。これにより、試掘調査によって埋蔵文化財の基本的な所在状況が把握でき、遺跡の所在状況の概略を示す遺跡地図（分布図）の作成が可能となるほか、試掘調査と一部並行させながら実施する範囲確認調査により、再開発事業を円滑に実施する上で重要となる、より精緻な遺跡地図の作成並びに遺跡の性格・範囲の把握等が可能となるわけである。調査の実施に際しては、在沖米軍海兵隊との間で調査範囲の事前調整を実施し、G5に対して許可申請を行っている。米軍との調整を含めた調査実施までの流れについては、右記フローチャートを参照されたい。

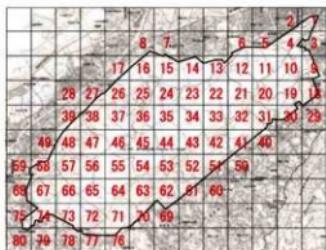
第2節 調査区の設定

調査区の設定は、普天間飛行場基地内において同時に試掘・確認調査を実施する県文化課・県埋文センターとの間で普天間飛行場基地内全域を対象とした調査区割りを行っている。今回の試掘調査においても、まず、基準点をX = 31000、Y = 26500の位置に設定して、そこからX・Y軸を300 mメッシュ毎に区切り第I区画とした。それを30 mメッシュ毎に区切り10分割した第II区画を設け、さらにそれを6 m四方の25分割にした第III区画の3段階に区割りした。（第III-2図）

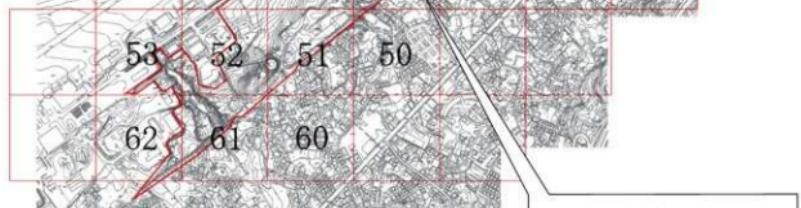
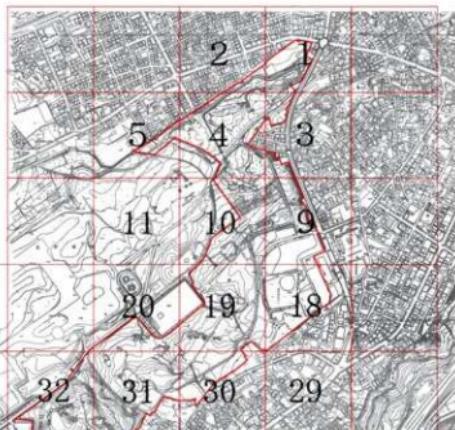
実際の調査区の設定は、これまでの試掘調査成果に基づき、調査地域内の現地形と旧地形、埋蔵文化財包蔵地の占地条件や口伝・伝承等についても考慮して試掘調査箇所を設定したほか、野嵩タマタ原遺跡及び上原同原遺跡の範囲確認調査成果を補完する目的で設定した。基本的には第II区画の区割りを使用して、試掘坑の四辺が第II区画ラインと重なるように各交点を基点とした。当該計画箇所に障害物があり、試掘調査に支障が生じると判断された場合には、適宜、第III区画の区割りを使用して、第II区画ラインと重なる当該地点に近い区画に平行移動させて設定することとした。



第III-1図 普天間飛行場基地内試掘・確認調査フロー・チャート

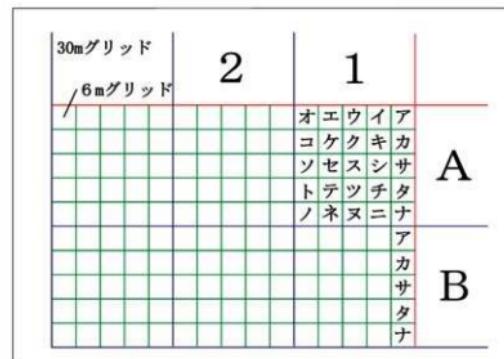


第Ⅰ区画（普天間飛行場基地全体）

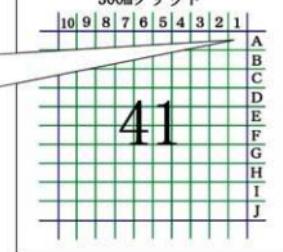


第II区画（調査区全体）

300mグリッド
10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



第II区画



第III区画

第III - 2図 普天間飛行場基地内グリッド設定図

第3節 調査方法

調査区を設定した後は、前回の試掘調査を実施した際と同様に、掘削作業に先行して不発弾等の危険物や地下埋設物の有無を確認し、安全に調査を進行させるための磁気探査を実施した。探査方法としては、軽層探査によって深度0.5m毎に探査を実施しており、重機による掘削作業を0.5m毎に停止して異常反応がないことを確認した上で掘削作業を再開するという手順になる。逆に、異常反応が得られた場合は確認探査をその都度実施する。確認探査とは、異常反応があった箇所を手堀りにより確認し、これらを除去後、再度探査を行い異常反応がないことを確認して掘削作業を再開するわけである。確認探査により検出された異常物が不発弾等の危険物である場合は、通常、地域の警察に通報して、警察もしくは自衛隊が処理を行う。しかしながら、調査地域が米軍施設内であることから、検出された危険物は、まず市教委及び市役所に通報し、併せて海兵隊環境保全課に連絡を行い、その後は海兵隊所属の爆発物処理班が撤去・処理を行っている。

基地内には縱横無尽に地下埋蔵物（電気・水道・通信・下水道等）が敷設されており、これらは調査の大変な障害となる。これらの中には軍事上重要なラインも存在しており、このような埋設物に破損を加えた場合は、試掘調査の中止命令に止まらず、日米両国間の外交問題や安全保障体制を揺るがすような問題に発展しかねない。これら埋蔵物の対処としては、調査許可地域に試掘箇所を設定し、埋蔵物を管理する米軍の不動産部署に対し、地下埋蔵物の敷設状況を照会して、現地での確認作業を依頼する必要がある。これにより埋蔵物があると判断された場合は、前述の調査区設定に従い、試掘坑の位置を移動して対応している。実際は米軍側も把握できていない埋蔵物等も確認されることがある。幸いにもこれまでの調査では、事故に至るような埋蔵物の破損はないが、埋設物の不時発見によって作業が中断することも少なくなかった。

磁気探査をクリアした後は、重機または手堀りによる掘削作業へと移行する。ここでは、重機による4m四方の試掘調査を例にして、具体的な調査方法を述べることとする。

宜野湾市の場合、基地内の試掘調査では原則として、表層から基盤層（岩盤または泥岩等の基盤層）まで掘削することとしている。その際、重機掘削による堆積層及び遺構等の破損を最小限に止めるために、数cm単位で掘削を行っている。堆積状況や遺物の出土状況に細心の注意を払いながら掘削を実行させ、遺物包含層や遺構が検出された地点で壁面及び床面の清掃を行う。その後は調査対象壁面の記録写真を撮影し、壁面図を作成するという流れになる。また、状況に応じて、確認された遺構を調査・記録後、サブトレレンチ状に掘り下げる形で掘削作業を継続して、下層の堆積状況や基盤層の検出を確認する場合もある。これは、本試掘調査が埋蔵文化財の有無確認のみを目的としているものではなく、琉球石灰岩を基盤層とするマージ層を層位的に把握して旧地形の復元を行うことで、最終的に埋蔵文化財包蔵地を推定することも大きな目的の1つとして位置付けているためである。

琉球石灰岩や島尻層群（クチャ・泥岩）等の基盤層の検出あるいは包蔵層及び遺構等の検出により、掘削作業が終了と判断されると、調査対象壁面及び遺構検出面の清掃を経て分層作業へと移行する。市担当職員による堆積状況の観察・分層・略図作成・所見記載・記録写真撮影後は、試掘調査の支援を目的とした委託業務として画像解析図化作業と自然科学分析調査を実施している。画像解析図化作業はオルソ画像を作成するための測量作業を行い、それをもとにしたデジタルとレースを実施している。また、自然科学分析調査業務は、市担当職員による前段の作業を踏まえて、堆積状況を土壤学的・地質学的・考古学的な側面から補完しながら土壌調査や埋化学的分析等の各種自然科学分析に必要な試料採取を行い、これらを基にして年代測定等の作業を実施している。

調査区内において自然環境を明らかにするための調査を実施する。
その後、計画された試掘坑の設定を行った後、希少動植物の生態に影響がない程度の伐採作業を実施する。



測量により試掘位置が確定された後で、磁気探査による異常物や地下埋設物の有無確認を実施する。



磁気探査により異常物や地下埋設物が無いことを確認した後は、重機掘削により試掘調査を開始する。

※磁気探査は 0.5m 掘削ごとに実施。



基盤層である石灰岩等を確認後、作業員により調査壁面の清掃を実施する。
調査対象壁面の清掃終了後は、調査員により、分層・層相観察所見の記載や調査壁面・遺構検出状況・遺物出土状況等の記録写真撮影を実施する。



調査員による各種記録作業が終了した後は、デジタルオルソ画像作成・デジタルトレースの作業に必要となる調査壁面の画像の撮影と座標の標定作業を実施する。



オルソ関連作業が終了した後は、旧地形及び遺跡の立地環境、堆積状況等の観察を行い、調査区全体の考察を行うための各種作業を実施する。

また、年代測定や各種分析調査に必要となる試料の採取も実施する。



調査に係る全工程が終了した後は、即日復旧の原則に従い、赤土流出等に配慮しながら、埋め戻し作業を実施して原状回復措置をとる。



図版III-1 試掘調査作業イメージ

第4節 調査経過

1. 試掘調査

調査範囲において谷地形となっている地点については、土層が厚く堆積していることが想定され、重機掘削等による手法では地下の埋蔵文化財まで確認できないと判断したため、谷地形を中心に19ヶ所に点でボーリング調査を実施した。ボーリング調査を実施するにあたり、掘削地点の位置出しを行い、機材搬入後に掘削を開始した。

また、谷地形以外の場所については、重機及び人力による掘削を行いつつ埋蔵文化財の確認を進めた。基本的には重機によって $4 \times 4\text{m}$ の試掘坑を掘削していたが、重機の進入が困難な緑地帯等では人力掘削に切替え、試掘坑の規模を $2 \times 3\text{m}$ 、 $2 \times 2\text{m}$ などに縮小したうえで調査を進めていった。なお、掘削調査は南西側から北東側に向かうように進捗させた。

掘削を行うにあたり、事前に試掘部分などの磁気探査を実施したが、今回の調査においては重要な案件になり得るような磁気反応がなく、実際に調査を進めていても特に調査に支障をきたすような事態はなかった。

試掘坑を目的の深さまで掘削した後は、土層の観察を行い、記録を随時とった。記録作業については、確認された文化財の位置や文化財に関わり得る堆積層（地層）の図化及び撮影等を行った。また、文化財に関わる当時の自然環境や人為的行為等を把握するため、必要に応じて自然科学分析の試料となり得る土壤を採取した。

今回の試掘調査に先立ち、ススキ等が繁茂している場所は伐開作業も実施した。その際に、宜野湾古集落の縁辺部において、戦前までの屋敷跡が比較的良好な状態で残存していたため、屋敷跡周辺については掘削を伴う試掘調査は取りやめた。その後、地域からの要望もあり、沖縄防衛局と協議をしたうえで、屋敷跡の調査前の状況をレーザー測量により記録をとった。

なお、調査の過程において樹木等の枝打ちを一部で行つたが、伐採物が風や雨で飛ばされたり流されることで基地運用の妨げにならないよう、隨時搬出及び処理を実施し、試掘調査を無事に終えることができた。



図版III-2 作業状況

2. 緊急発掘調査

緊急発掘調査は2年度に分けて実施した。平成26年度は試掘調査前の伐開によって確認された宜野湾古集落縁辺部に位置する屋敷跡等及び赤道渡呂寒原古墓群に所在する古墓2基の調査を行った。屋敷跡等については、屋敷跡のほか隣接する道跡や畑跡も当初の工事計画に掛かっており、必要に応じて掘削調査を実施していた。しかし、調査中に道路線形が見直されたことに伴い、屋敷跡の大部分が計画から外れしたことからすべての遺構の掘削及び調査をせず、部分的にトレーンチを入れることで屋敷跡等の最低限の記録をとった。

一方の古墓は、当初は3基を調査対象としていたが、2号墓直上の樹木が傾いており、調査中に倒木の恐れもあつたため、安全性を優先し2号墓については調査を断念した。

2年度目の平成27年度については、赤道シキロー流域古墓群縁辺部（1地区）、神山後原丘陵古墓群縁辺部（2地区）、宜野湾シリガーラ流域古墓群（3地区）の3ヵ所の遺跡地において、それぞれ地区を分けて調査を実施した。遺跡地の主な種別はいずれも「古墓群」となっているが、1～2地区は近世以降の耕作や道跡等に伴う遺構が主に確認され、3地区のみ平成16年度に把握された古墓2基の調査を実施した。

調査範囲伐開後の調査区設定の際に、樹木を避ける必要が生じたため、1～2地区は調査区を分割することになった。調査区設定後は掘削前の磁気探査を行った場所から随時掘削を進めた。基本的に重機で表土や造成土の掘削を行ったが、重機が進入できない場所では人力により掘削を進めた。調査区内の掘削後は、検出した遺構等の詳細情報を隨時記録し、必要に応じて自然科学分析での試料として各遺構の覆土を採取した。また、3地区では古墓調査に際し、墓室内において複数基の扇子を確認したが、墓室内天井の岩が崩落する恐れがあったため、墓室内の調査を断念し、墓庭のみの調査を実施した。

なお、調査の進捗に応じて必要最低限の樹木等の枝打ちを行い、その際に生じた伐採物については搬出・処理を行った。



図版III-3 作業状況

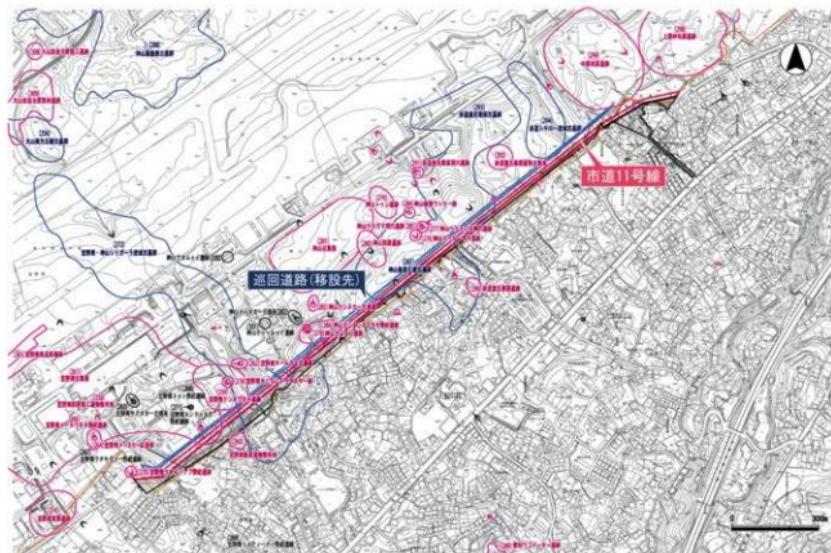
第IV章 試掘調査報告

第1節 敷地分析と周知の遺跡

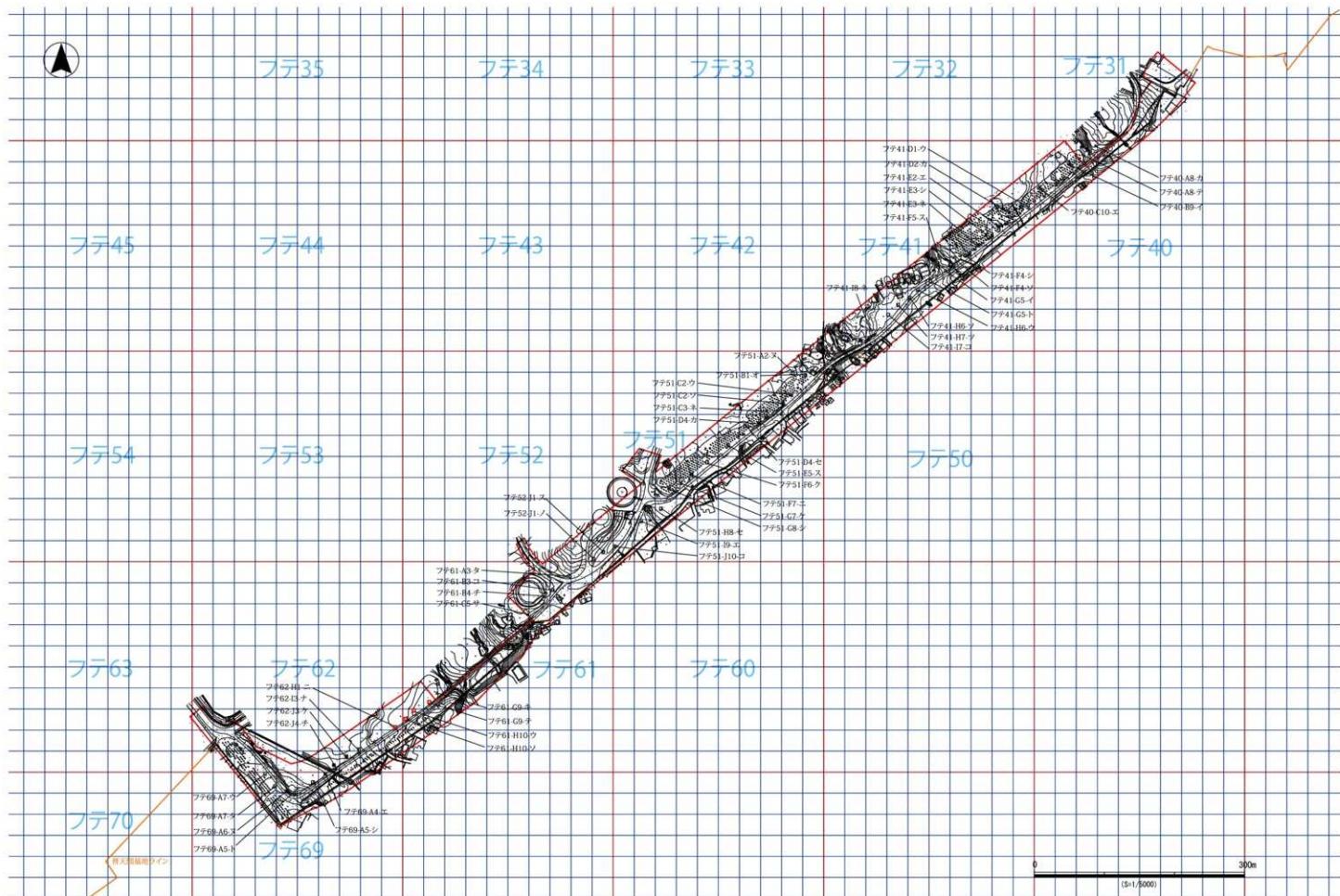
調査地敷地は、普天間飛行場内南東側に位置しており、北側の中原区から赤道区、神山区、宜野湾区などに跨るように所在する。敷地内は、野嵩ゲート側から佐真下ゲート方面へと繋ぐ管理用道路沿いに位置しており、かつての那覇防衛施設局（現・沖縄防衛局）が整然と植樹したガジュマル群や樹木が繁茂する緑地帯などが含まれている。敷地の南東側ではフェンス越しに基地外の住宅地などを見ることができ、赤道区内の宜野湾中学校や宜野湾区内の市民パーク等の公共施設も望むことができる。西側には飛行場の滑走路及びエプロンが位置し、南西側には倉庫等が集中して配置されている（宜野湾市教育委員会 2005）。

敷地内の地形については、東側から西側にかけて傾斜する石灰岩台地に位置しており、南東—北西方向に複数の尾根や谷状の地形がみられ、比高30m未満の起伏丘陵をなす（宜野湾市教育委員会 2012）。また、植生については二次灌木が密集するとともに、植樹されたガジュマルが立ち並ぶ（宜野湾市教育委員会 2005）。

調査地敷地には、赤道渡呂寒原古墓群（近世～近代）、神山後原丘陵古墓群（近世～近代）、宜野湾シリガーラ流域古墓群（近世～近代）、宜野湾古集落（近世～近代）などが所在するが、敷地周辺にも中原遺跡（グスク時代等）、赤道シキローフ流域古墓群（近世～近代）、赤道渡呂寒原屋取古集落（近代等）、神山カンミン遺跡（縄文時代晚期並行期、近世～近代等）、宜野湾後原遺物散布地（グスク時代等）をはじめ、その他にも数多くの洞穴、湧泉、拌所など主に近世～近代にかけての遺跡が多く見られる（宜野湾市教育委員会 2014）。



第IV-1図 巡回道路位置図および周辺遺跡分布図



第IV-2図 試掘坑平面図

第2節 基本層序

平成13年度から実施している試掘調査の成果から、これまで普天間飛行場内調査区全体に共通する10枚の層序が確認^{※1}されており、これらを当該調査区の基本層序として設定している。また、遺物包含層として設定しているⅡ層については、これまでの調査成果により5つの時期に区分している。これは、第4期試掘調査での報告にもあるように野嵩タマタ原遺跡、フテ43地区における谷地形の堆積層の調査成果を基準として、土地改变や遺構等に由来する不整合面や、その他層の観察所見、出土遺物の年代観、年代測定値等を加味して、下記に示すようにユニット①～⑩で表した（宜野湾市教育委員会編 2006・2009）。

ユニット⑤は、第6期試掘調査において、上原瀧原遺跡（縄文時代晚期並行～近代）で確認され、新たに設定した層序である。今期の試掘調査箇所であるフテ13-E2-ナ地点においても、ユニット⑤に相当する層序が確認されたことから、上原瀧原遺跡との関わりが窺える。

※1 今回調査した各試掘坑のI・II層の枝番号は、それぞれの試掘坑において堆積する順序を便宜的に表したものであり、必ずしも他の試掘坑と対応するものではない。II層対応関係は、ユニット番号を参考にされたい（宜野湾市教育委員会編 2009）。

第IV-1表 基本層序の土色一覧

層序	土色	備考
I層	2. SYR 4/3～4/6 SYR 2/1 7. SYR 3/1～4/4 10YR 3/1～3/4 10YR 4/1～4/3	にぶい赤褐色～赤褐色 黒褐色 黒褐色～褐色 黒褐色～暗褐色 褐灰色～にぶい黄褐色
	SYR 4/3	表土、腐食層。 Ib層以下は除外。
	7. SYR 4/2～4/4 7. SYR 5/4	石炭岩の小礫を多く含む。 炭化物、腐食、マンガン粒、燒土など。
	10YR 4/2～4/3	灰黃褐色～にぶい黄褐色
	2. SYR 4/3 7. SYR 3/2～3/3 7. SYR 4/3～4/4	にぶい赤褐色 黒褐色～褐色 褐色
II層	10YR 4/2～4/4 7. SYR 3/2～3/4 7. SYR 4/2～4/3 10YR 4/2～4/4	灰黃褐色～灰褐色 黒褐色～灰褐色 灰褐色～褐色 灰褐色～褐色
	7. SYR 3/2～4/3 7. SYR 4/2～4/3	炭化物、腐食、マンガン粒、燒土など。 色調はII層で最も暗い。
	7. SYR 3/2～4/3	炭化物、腐食、マンガン粒、燒土など。 ユニット③に比べて色調やや明るい。
	10YR 5/4～5/6	にぶい黄褐色～黄褐色
	7. SYR 4/3～4/6	褐色
IV層	SYR 5/6	明赤褐色
	7. SYR 4/4～4/6	褐色
V層	SYR 5/6	明赤褐色
	7. SYR 4/4～5/8	褐色～明褐色
VI層	SYR 5/4～5/6 7. SYR 4/4～4/6 7. SYR 5/3～5/6 7. SYR 6/4 10YR 5/4	にぶい赤褐色～明赤褐色 褐色 にぶい褐色～明褐色 にぶい褐色 にぶい黄褐色
	SYR 5/6	明赤褐色
	7. SYR 3/3～3/4	暗褐色
	7. SYR 4/3～4/4 7. SYR 5/4～5/6	褐色 にぶい褐色～明褐色
	10YR 4/4	褐色
VII層	SYR 5/6 7. SYR 3/3～3/4 7. SYR 4/3～4/4 7. SYR 5/4～5/6 10YR 4/4	明赤褐色 暗褐色 褐色 にぶい褐色～明褐色 褐色
	SYR 5/6	明赤褐色
	10YR 7/1	灰白色
	2. SYR 5/2～5/3	灰赤色～にぶい赤褐色
VIII層	2. SYR 5/1	赤灰色



第IV-3図 基本層序
(合成画像柱状図)

I層：主に盛土や造成層・搅乱層から成る層で、表層には腐植土壌が堆積する。本層内には近代以降の遺物が多く見られる。

II層：基地接收以前の旧表土や旧耕作土。塊状の褐色（鈍い黄褐色）砂質シルト層。炭化物や微細な焼土片を含み、空隙が多い。II層は畑地耕作土の性格を有し、特に谷地形ではII層が厚く堆積し、土地変形や遺構等に由来する不整合面やその他層相観察所見、出土遺物の年代観、年代測定値等を加味して4つに時期区分した。年代測定を実施した箇所については本章以降に詳細を述べる。

ユニット①：戦前～基地接收後に相当。上層は基地接收後の黙認耕作土、下層が近代の耕作土。灰褐色砂質シルトで基質の均質度は高い。炭化物、焼土粒を僅かに含む。

ユニット②：近世相当の耕作土。褐色～灰褐色の砂質シルトで、上位層に比してやや粘質土が高い。炭化物や焼土粒等の混在物も多くなり、根痕等も認められる。

ユニット③：グスク時代相当の耕作土。暗灰色～黒灰色の砂質シルト～シルトで腐食が多い。炭化物粒、焼土粒、マンガン斑などの集中が見られ、混在物も多い。下層のほぼ同レベルで植栽痕と想定されるピットが検出される傾向にある。

ユニット④：古代～グスク時代初期相当期の耕作土。灰黄褐色～鈍い黄褐色のシルト～粘土質シルトで、全体的に腐食が多く焼土粒も多く含まれ、根痕が著しく多い。

ユニット⑤：黄褐色を呈した粘質シルト層。炭化物や、鉄錆の様に赤く変色し、硬質化したマンガン粒を含む。（縄文時代後期～貝塚時代後期を経た後に、谷地へと流れ込んで堆積した土と推測される。）

III層：マージの二次堆積層で、塊状をなす褐色の砂質シルト層。下位のIV層に比して泥質で、団粒構造の発達も良好。IV層との層界には凹凸やIII層より充填された根痕も見られ、マンガン斑の濃集も認められる。

IV層：明黄褐色（褐色）を呈し、上方が細粒化をなす塊状の砂質シルト。地山。

V層：明黄褐色（明褐色）の砂質シルト。V層はVI層に比して非常に泥質で、団粒構造の発達も良好。VI層との層界は凹凸することもあるが、IV層との層界は比較的平坦。地山。

VI層：明黄褐色を呈し、僅かに上方細粒化する塊状砂質シルト。側方の層厚変化が著しい。VI層は最も砂質な堆積層で、V・VI層は下位に存在するVII層と、その直上のVIII層に伴う大きな起伏を埋積するよう堆積する。地域によっては土質などによって大きく3層に細分される。地山。

VII層：暗褐色の砂質粘土質シルト。基盤層の起伏に沿って堆積し、起伏に富む。地山。

VIII層：灰白色を呈する琉球層群の石灰岩。表面に容食痕が認められ、最上部では風化が進行する。

IX層^{※2}：島尻層群の泥岩風化層。灰オリーブ色。塊状やブロック状に剥離するなど、の泥岩特有の風化が顕著。地山。

X層^{※2}：島尻層群を構成する泥岩。灰色を呈する。地山。

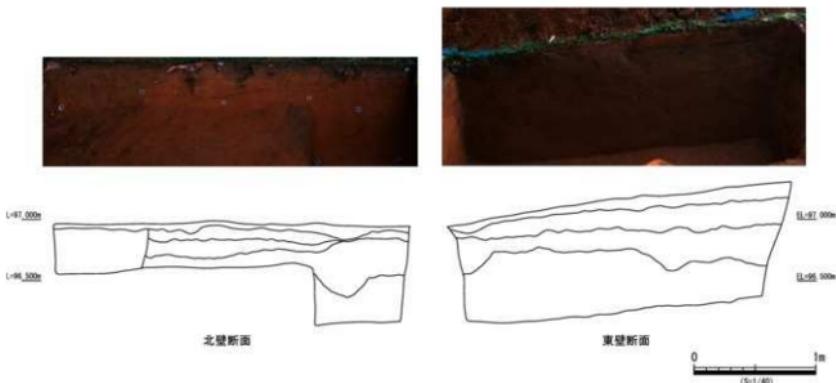
第3節 調査の概要

今回の試掘調査では、重機により 4×4 m規模を 34ヶ所、 4×3 m規模を 2ヶ所、 3×3 m規模を 5ヶ所掘削し、 2×2 m規模の 13ヶ所については人力により掘削を行ったところ、6ヶ所の試掘坑で遺構が確認された。確認された遺構は、集石 1基（フテ 40-A8-カ）、ピット 2基（フテ 40-B9-イ）、石積み状遺構 1基（フテ 41-C5-イ）、落ち込み状遺構 1基（フテ 51-C2-ウ）、溝状遺構 1基（フテ 51-F7-ニ）、炭溜まり 1基（フテ 69-A4-エ）などがある。また、今回は僅かな遺物しか確認されず、遺構や堆積層の明確な時期を把握するには至らなかったものの、一部の地点においては地表面に畑の歴史が残存していたことから、比較的新しい時期まで土地利用がなされていたことが想定される。なお、遺物包含層については概ね I 層（表土層、造成層）及び II 層のいわゆるユニット①（近現代の耕作土）の確認が目立ち、基盤層については琉球石灰岩を基盤とする地点が 17ヶ所、島尻層群を構成する風化した泥岩層（いわゆるクチャ）を基盤とする地点が 9ヶ所、島尻層群を構成する泥岩層を基盤とする地点が 1ヶ所で確認できた。

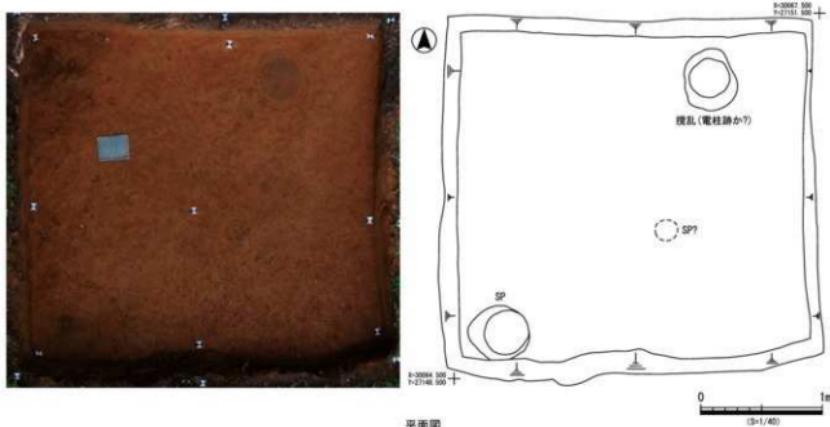
今回の試掘調査において遺構が確認された試掘坑のうち、工事で盛土がなされる予定の地点については、移設後の「巡回道路が基地返還までの仮設道路」という位置付け上、緊急発掘調査の対象には含めないことで調整をしており、将来的な開発協議に資する情報として記録した。

フテ 40-B9-イ

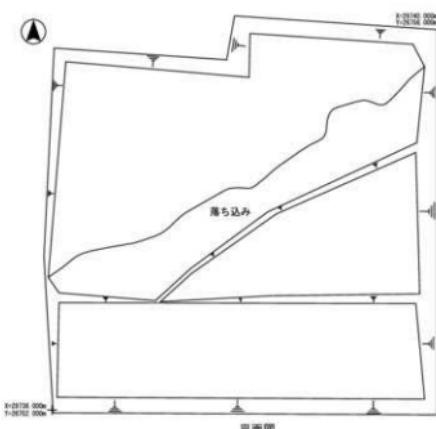
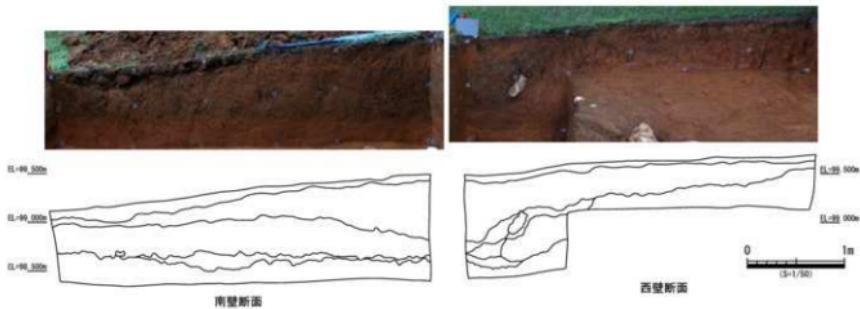
赤道渡呂寒原と赤道上原の小字境界付近に所在する。表土層（I 1層）に覆われる造成土層（I 2層）及び近代以降の旧耕作土層（II層）、地山となるマージ（IV層、V層）が確認された。地山面ではピット 3基を検出し、径 50 cm程度のピット 2基の半裁を行った。北東側のピットは検出面から深度 50 cm程度であったが、立ち上がり（掘り込みライン）が垂直で直線的であり、覆土の締まりも弱かったことから、近現代に掘り込まれた擾乱と考えられる。一方、南西側のピットは検出面から 60 cm程度の深度があり、旧耕作土に由来とする覆土で締まりも認められたことから II 層の時期に属すると思われるが性格は不明である。なお、遺物は出土していない。



第IV-4-1図 試掘坑断面図① フテ 40-B9-イ



第IV - 4-2図 試掘坑平面図① フテ 40・B9・イ



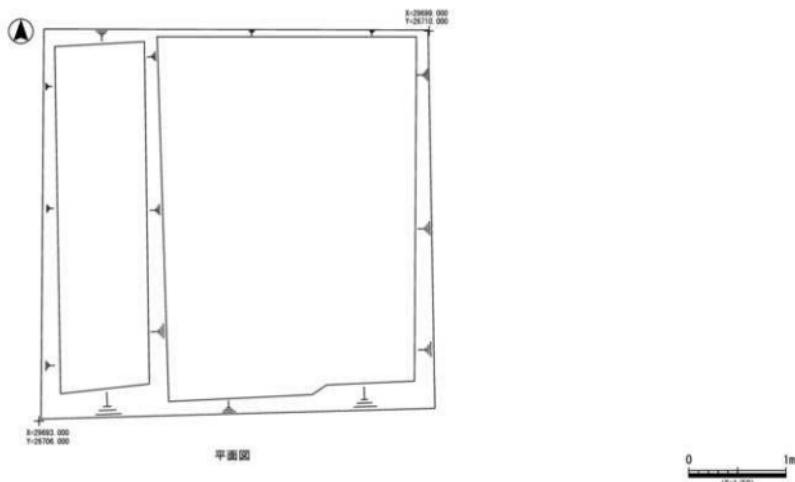
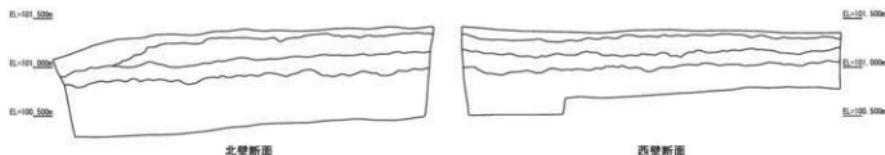
フテ 51・C 2・ウ

神山後原に所在する。表土層（I 1層）及び造成土層（I 2層）の下位には、近代以降の耕作に伴う土層（II 1～5層）や地山であるマージ（IV層 or V層）が堆積する。II層を覆土とする落ち込み状遺構は、地山層を北東～南西軸で掘り込んでつくられ、その遺構に沿って石列を配する。II 5層については、耕作に伴う造成等の可能性があり得る。なお、当該遺構は土地の区画跡になり得、礫は土留めの役割を担っていたことが推察されるが、詳細の確認は緊急発掘調査に譲る。遺物は確認されていない。

第IV - 5図 試掘坑断面図・平面図② フテ 51・C 2・ウ

フテ 51 - D 4 - 力

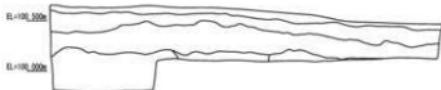
神山後原に所在する。層序は表土層（I 1層）、造成層（I 2層）、近代以降の旧耕作土層（II層）、地山のマージ（IV層）の堆積が確認できた。また、試掘坑の床面においては南側で径約 20 cm のピット 1 基を検出したが、輪郭が明確でなく、覆土からの炭化物も僅かであったことから、遺構とは断定せず、緊急発掘調査の際に詳細確認することとした。地山は、水の浸透具合により上部はマンガンの影響を強く受け、土色は暗めとなるが、下部は明るみを有する。遺物は見られなかった。



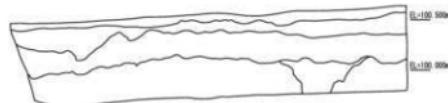
第IV - 6 図 試掘坑断面図・平面図③ フテ 51 - D4 - 力

フテ 51 - E 5 - S

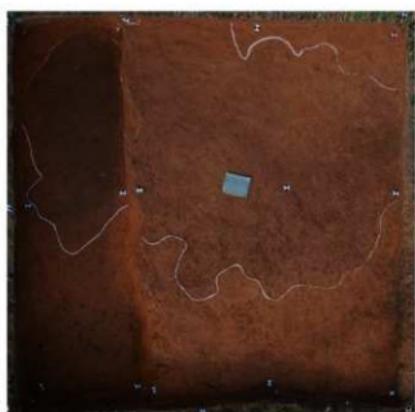
神山後原に所在する。堆積層については、表土層（I 1 層）、造成層（I 2 層）、近代以降の旧耕作土層（II 層）、地山のマージ（IV 層）などが確認された。試掘坑の地山検出面において、平面形態がかなり歪な落ち込みと思われる痕跡が確認された。落ち込み跡は平面長軸が約 4 m、短軸は約 3 m を測り、試掘坑壁面においても立ち上がりが確認されるが、上面は II 層に削られている。落ち込み跡の覆土からは焼土や炭などが確認されたものの、自然科学分析において年代測定を行うと約 22,800 年前後の数値が得られ、下層の IV 層の年代に近いことから当該落ち込み跡が人為的な掘り込みではないことが窺えた。なお、遺物は得られていない。



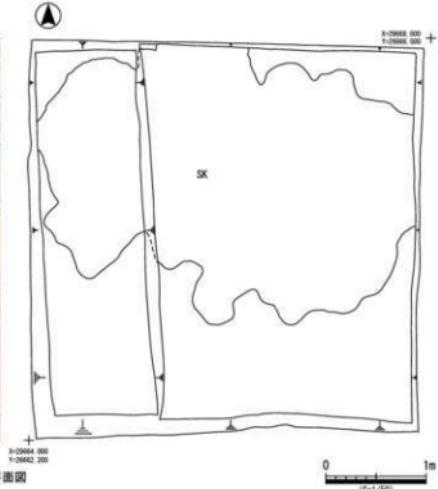
北壁断面



西壁断面



平面図



第IV - 7 図 試掘坑断面図・平面図④ フテ 51 - E5 - S

第V章 本調査の成果

第1節 平成26年度調査

1. 調査区の設定

平成26年度の調査は、道路線形にかかる宜野湾古集落の縁辺部に位置する屋敷跡等（屋敷跡、道跡、畑跡）及び赤道渡呂寒原古墓群の縁辺部に所在する古墓が対象となった。屋敷跡等の調査区については、残存する遺構の軸に沿うように5m四方のグリッドを配して任意の作業軸を設定し、北側隅の交点をグリッドの名称とした。設定したグリッドの軸を基軸とし、その基軸に沿うように屋敷跡等に関わる各遺構にトレーンチを設けて（第V-2図）掘削及び記録作業を行った。

古墓については、石灰岩崖面に造られた掘込墓2基が調査対象となったが、墓口前面のスペースが狭く、調査を進めるうえで安全性を確保するために全面を掘削することが困難であったことから、墓庭から墓室内にかけて墓口に直交するようにトレーンチをそれぞれ設けて調査を進めた。

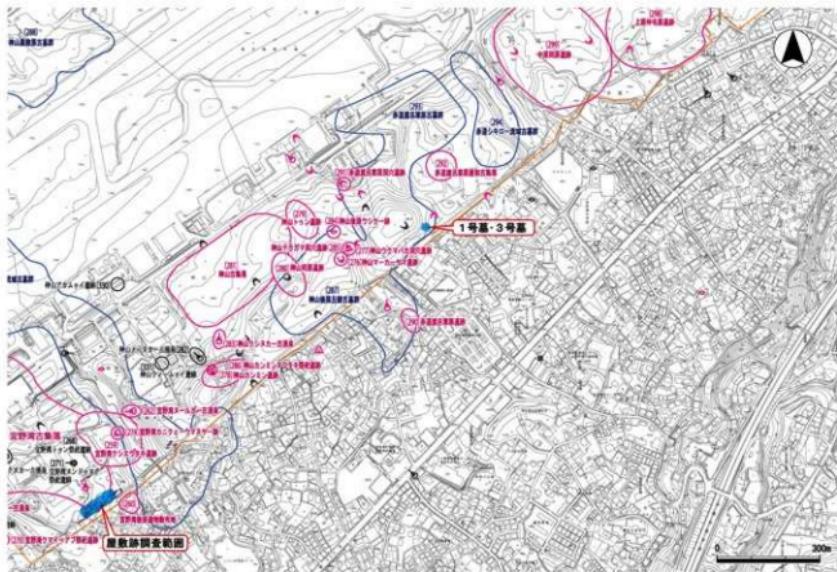
2. 層序

屋敷跡等については、家屋部、屋敷跡南西部、屋敷跡北東部、道跡、畑跡に大別して調査を実施し、調査地の層序は以下のとおりとなる。なお、各トレーンチ断面図の層番号と下記層序の対応については第V-24表にまとめた。

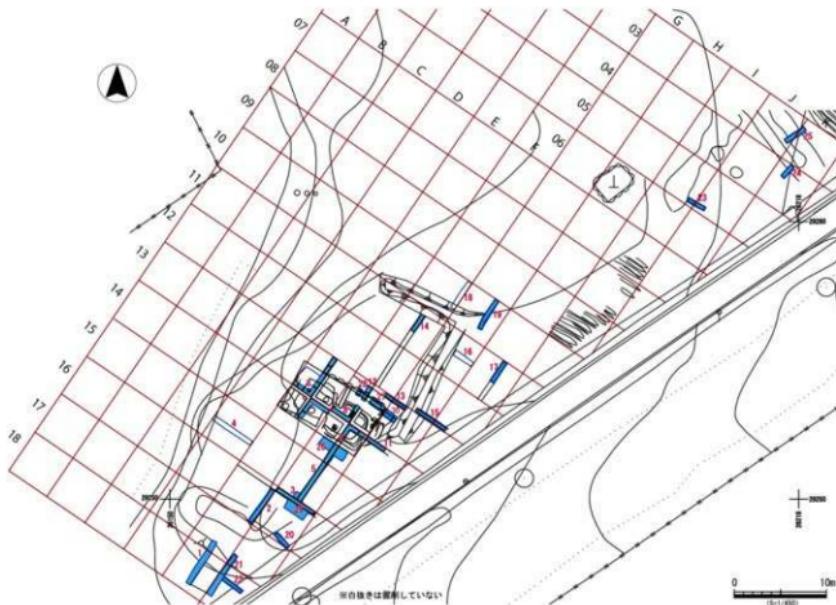
家屋部における層については、VI a層及びVI b層は家屋部を構築した際の造成であることが考えられる。堆積状況より、地山の造成、VI b層の造成土による整地、VI a層の造成土による整地の少なくとも3回の造成が行われていた可能性が考えられる。また、VII層の家屋部内をめぐる溝状遺構1については、VI a層とともに地山を掘り込んで構築される。さらに、11層の盛土遺構の造成についてもVI a層の造成後に構築されたことが確認された。

一方、屋敷跡の層序については、一部の地点で戦後の造成などの影響が見られたが、それ以前については地山の整地を行った後にV a層造成の整地がなされていたことが認められた。屋敷跡の南西側においては、V a層の造成前にV b層の造成土による整地を行っているようであるが、他の地点では確認できなかった。なお、南西側においては米軍の造成土も見られた。一方、屋敷廻いを構成する南東側の盛土遺構の外側では、V a層に類似する造成層が見られたが層序の対応関係が断定しがたかったため、当該層をV c層とした。そして、12層においては2枚に細分することができ、少なくとも2階の造成がなされたことが窺えた。また、屋敷地内の溝状遺構3のIX層は造成・修復等に時間的な幅がみられ、a～cの3枚に細分したが出土遺物には明確な時期差は見られなかった。

屋敷地外については、道跡や畑跡等が確認された。道跡については屋敷跡の北側（道跡2）及び南側で認められ、北側については道に付随すると思われる溝跡が残存する以外、戦後の黙認耕作などではぼぼ壊されていた。一方の南側では、上部が戦後の米軍などによる造成等がなされていたが、下部にはIV b、IV c層が残存し、戦前までの道跡等の可能性が想定される。また、畑跡においては黙認耕作などを含めて近現代の耕作土層や溝状遺構等が確認された。石積状遺構については、V c層をきった後に構築していることが窺えた。



第V-1図 巡回道路周辺遺跡分布図



第V-2図 トレンチ配置図

3. 遺構

平成 26 年度の調査は、宜野湾古集落縁辺部に位置している屋敷跡等と赤道渡呂寒原古墓群に所在する古墓 2 基が対象になった。宜野湾古集落の屋敷跡等については、試掘調査時において当初 4 カ所程度の試掘坑設定を予定していたが、調査前の伐開作業の際に屋敷地を囲う屋敷廻いや家屋の石柱、土手（盛土遺構）、石敷などが比較的良好に残存している状況が確認されたため、掘削を伴う調査は中止した。なお、ここでは屋敷跡等と古墓に分けて遺構の紹介をする。

1. 屋敷跡等

屋敷廻いとしての盛土遺構に囲われた範囲を屋敷跡とし、屋敷跡周辺の道跡や畑跡をも含めて「屋敷跡等」とした。以下に主な遺構を紹介する。

盛土遺構・溝状遺構（家屋部）

家屋部には造成土や地山を掘り込んだ溝状遺構 1 が家屋内を廻っていることが見られた。また、家屋部の壁の土台となる盛土遺構は、遺構上部に石積みによる壁が構築されていたことが想定されるが、ほとんどが崩落しており一部の礫が部分的に残存している状況である。また、家屋部の外側においては、盛土遺構を切って地山まで掘り込んだ溝状遺構 2 が家屋周縁に設けられる。家屋部に関わる盛土遺構及び溝状遺構については、土質的な変化があまり認められなかったことから、造成または修復等に係る作業を短期間で繰り返し行ったことが考えられる。

ピット

家屋部で検出されたピット 1・2 はともに 10cm 前後ののみの掘り込みで柱痕等は見られないため用途は不明である。ピット 3 は石柱に伴う遺構で、地山を約 50cm 掘り込んで石柱を立て、ピット内に 10 ~ 20cm 大の礫を詰めて土を充填している状況が確認された。

盛土遺構・溝状遺構（屋敷地）

屋敷地を囲う盛土遺構は、北東側及び東側において良好に残存しており、南西側では戦後の盛土造成と思われる痕跡が確認された。東側などの盛土遺構は、断面状況から少なくとも 2 段階の構築が考えられる。なお、盛土遺構上部には竹が多く見られた。

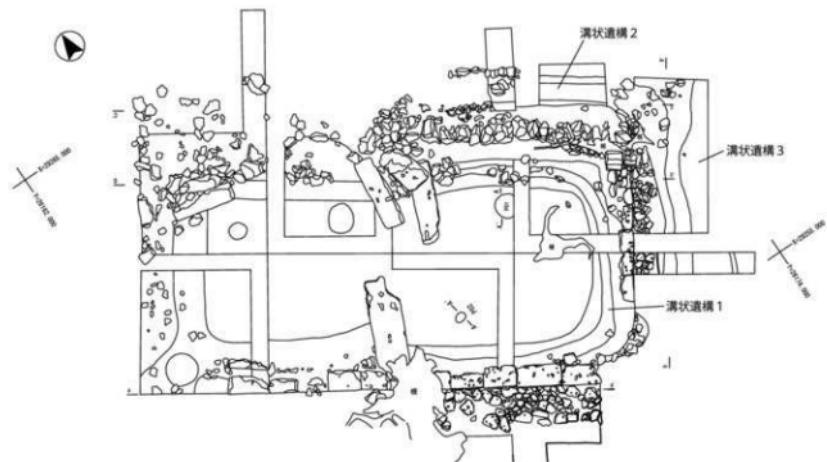
屋敷地内周縁には溝状遺構 3 が盛土遺構を切るように地山まで掘り込んで配される。家屋部東側では 1 条のみであるが、北側においては溝状遺構の内側に小堤を隣接して設け、別の溝状遺構が認められた。また、屋敷地外においても盛土遺構を切る新旧 2 基の溝状遺構が確認された。新しい溝状遺構は表土層直下にあり、その状況から戦後に掘り込まれたものと思われる。一方の古い溝状遺構は当該屋敷跡に隣接する別の屋敷跡の造成層を切って掘り込んでいるため、近代以前の屋敷跡に関わる遺構であることが想定される。

道跡

屋敷跡の南西側（道跡 1）及び北東側（道跡 2）にそれぞれ位置する。道跡 1 は現フェンス外に続く旧道であったが、表土層直下は戦後の砂利敷き及び溝跡や造成層などが検出された。砂利敷き等の下位には旧表土や里道と思われる層も確認されている。一方、道跡 2 については戦後の黙認耕作等により残存状況が良好ではなかった。詳細は後述の石積遺構において報告する。

畑跡

屋敷跡の周辺で確認されており、黙認耕作に関わると思われる畠間や旧耕作土層などが確認された。また黙認耕作時の盛土なども確認されている。



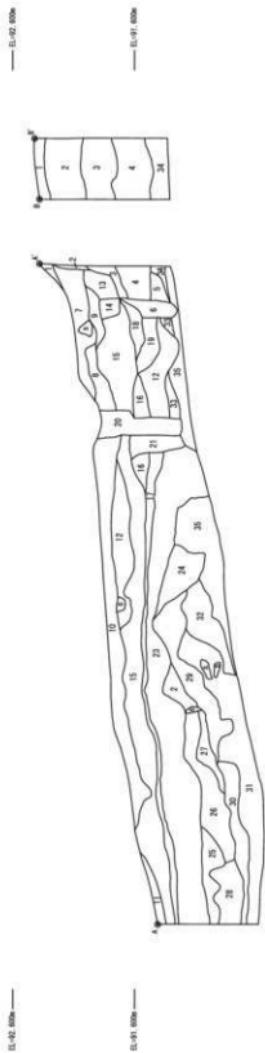
第V-3図 家屋部平面図



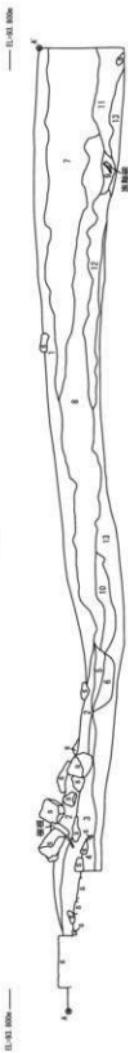
図版V-1 家屋部平面オルソ

2. レンチ

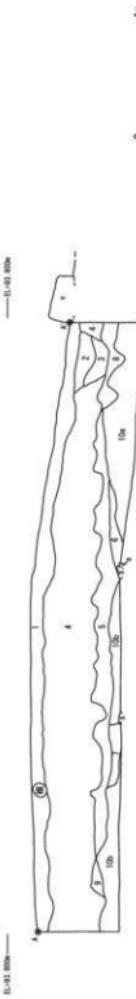
四四



No. 5

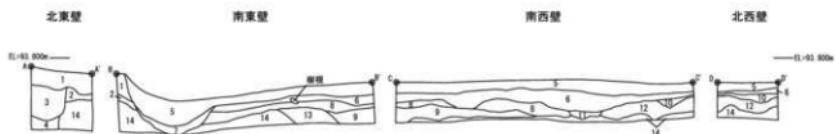


No. 3
北東壁

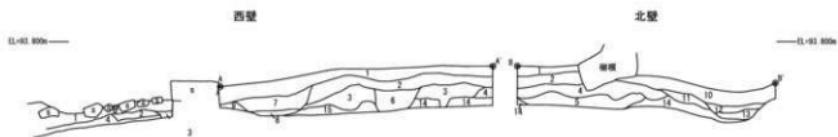


第V-4図 トレンチ断面図①

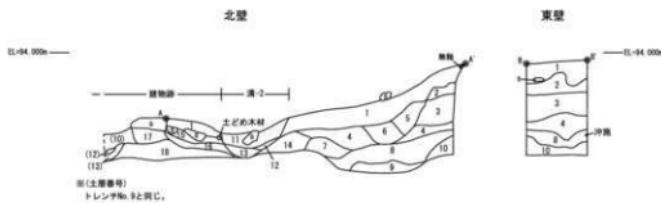
No. 8



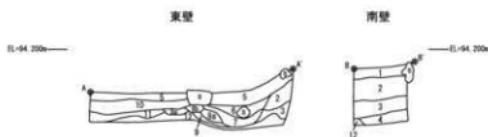
No. 9



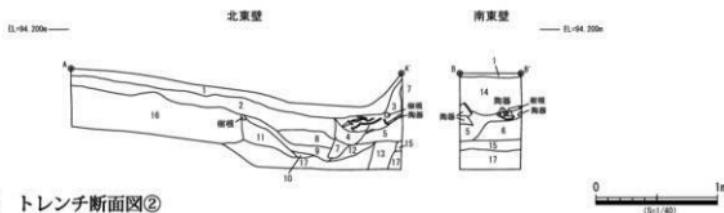
No. 11



No. 12



No. 13

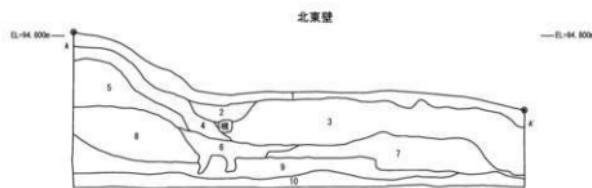


第V - 5図 トレンチ断面図②

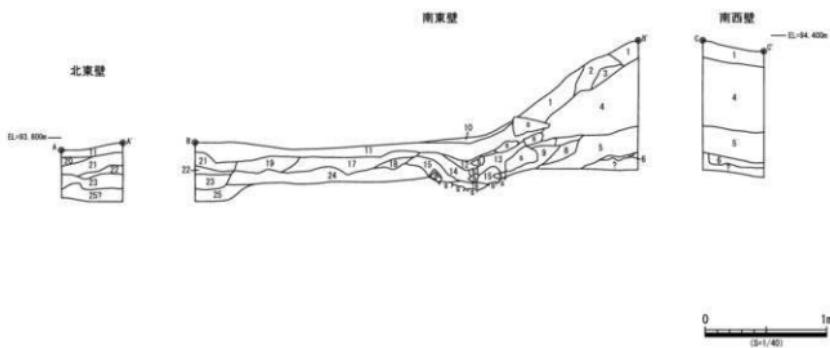
No. 14



No. 15



No. 19



第V - 6図 トレンチ断面図③

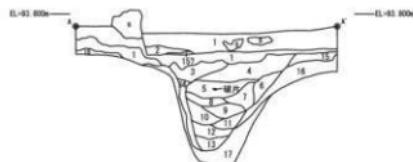
No. 29

南壁



No. 30

北東壁



P03

P01

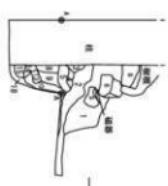


P02

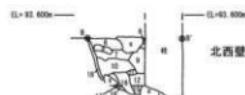
西壁



北東壁



平面図



第V - 7図 トレンチ断面図④

石積状遺構等

石積状遺構は、屋敷畠に隣接する道跡の状況を確認するために設定したトレンチ 19において確認された遺構である。確認された遺構は、石積状遺構と底面に石敷きを作り溝跡などである。石積状遺構は造成層の上位に約 50cm の高さで構築されており、この造成層はトレンチ 15 でみられた屋敷地外の造成層と対応関係にあると考えられる。石積みは礫間を土で埋める状況が確認され、家屋部の盛土上石積みと同様の状況であることが見受けられた。溝跡は、幅約 70cm、深さ約 20cm の規模で地山を掘り込んで構築されており、底面に礫を敷いていることが認められた。また、溝跡と石積状遺構の境に少なくとも 2 段の石列が確認された。この石列の性格は判然としないが、石積状遺構に関わる遺構である可能性が考えられる。なお、溝跡については屋敷畠に隣接する道跡に伴う遺構であると考えられるが、当該遺構のほかに道跡に関連し得る遺構は確認されなかった。また、石積状遺構についても盛土表面に見られる礫は腐食土層において位置していることから、戦後の黙認耕作時に当該地に集積された礫群であると考えられる。



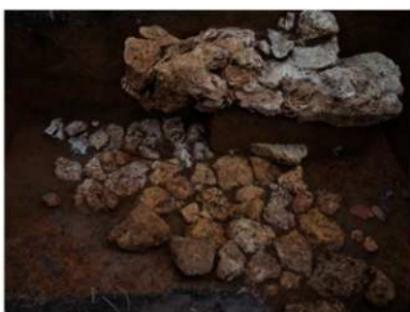
石積状遺構と溝跡



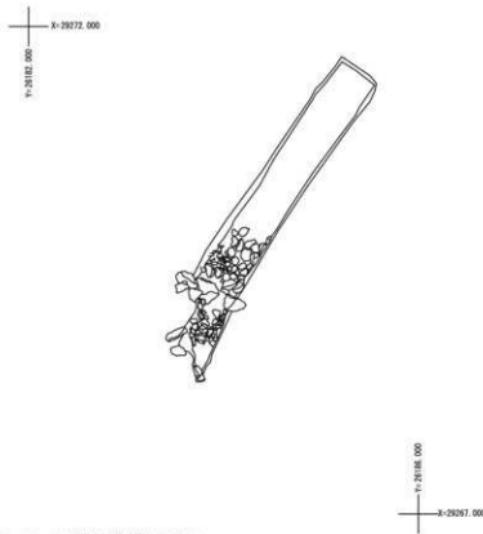
遺構断面状況

石敷き遺構

当該遺構は、トレンチ 3 を拡張したトレンチ 29において検出された遺構で、地山面を南東側に向かってやや傾斜するように造成した後に礫を敷き詰めている状況が確認された。当該遺構は屋敷跡に関わる遺構であることが想定され、礫上面が磨耗していることからも家屋部へと続く石畳的な構築物であった可能性が考えられるが、今回の調査においては詳細を確認するにいたっていない。なお、遺構面からは野村廣貫堂の薬瓶が出土していることから、昭和初期ごろに機能していたことが推察される。また、当該遺構は部分的に石敷きが整っておらず、一部が後世の造成等により破壊されている状況が見受けられる。当該遺構の上位に長さ約 1.5 m、厚さ約 45cm の柱状石材が検出された。石材は当該遺構が使用されなくなった後の造成層中に包含されており、石敷きの一部が破壊された際に遺構の上位に寄せられたものと思われる。なお、当該石材は家屋部で見られた石柱に比して粗めの加工になっているため、別途の用途を持っていたと推察されるが、その詳細については確認するにいたっていない。



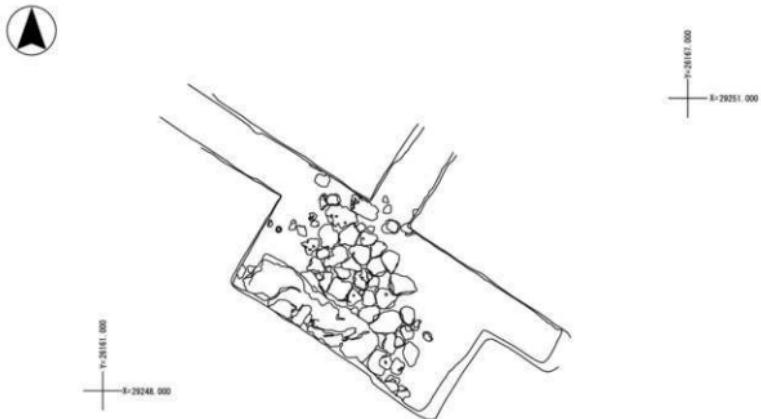
石敷き遺構と柱状石材



第V-8図 トレンチNo19 石積み遺構平面図



図版V-2 トレンチNo19 石積み遺構オルソ



第V-9図 トレンチNo29 石敷き遺構平面図



図版V-3 トレンチNo29 石敷き遺構オルソ

2. 古墓

平成26年度の緊急発掘調査の対象となったのは、赤道渡呂寒原古墓群の縁辺部に所在する古墓3基であったが、うち1基については古墓上部に位置する樹木が倒れる恐れがあったため、遺構周辺における調査はやむを得ず断念した。

1号墓

1号墓は北東向きの古墓。墓口が塞がれておらず、厨子などは確認されなかった。石灰岩崖面を半ドーム状に掘り込んで墓室を構築しているが、墓室内の壁面は丁寧に削られることなく荒さが残る。墓室内の床面が形成されたのち、盛土や礫などを用いて墓口を構築している状況が確認された。また、墓口が形成された後は墓庭の床面が造成されたことが認められた。当該古墓からは遺物の出土があまりなく、崩落した礫を除去した際に男性用の簪が出土している。



1号墓室内状況



1号墓底等確認状況

3号墓

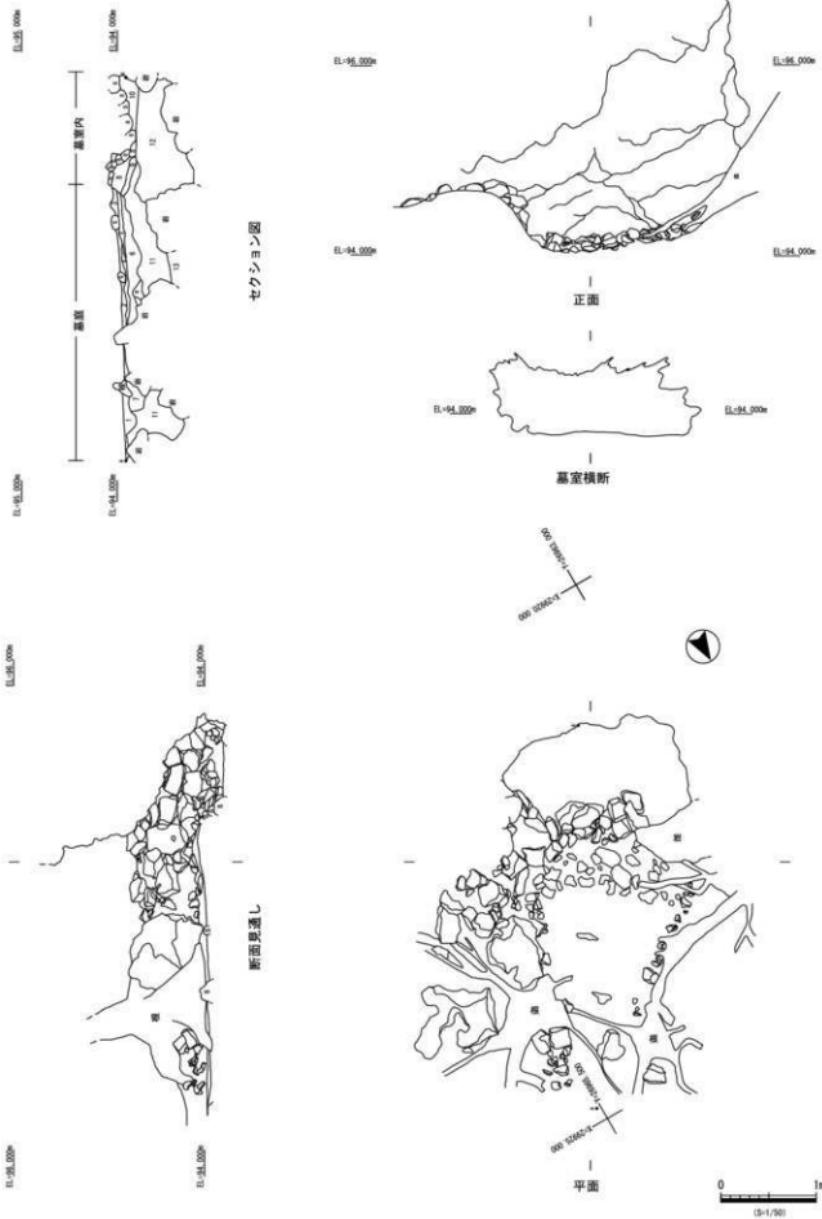
3号墓は北東向きの古墓。1号墓と同じ石灰岩崖面に所在するが、1号墓より上段位に造られる。墓室内部は半ドーム状に掘り込まれるが、壁面はほとんど加工がなされず、自然面が見受けられる。墓室ない床面の形成から墓庭の床面形成までの造墓工程は、概ね1号墓と同様であることが確認された。なお、調査前においては墓口を塞ぐ石積みが途中までしかなされていなかったが、墓を移転する際に石積み上部を崩し、厨子などの搬出後は積み直されることもなかった可能性が考えられる。なお、当該古墓では沖縄産施釉陶器碗や釘等が出土し、墓庭からも人歯と思われる骨が出土した。骨については、1点のみの検出のため厨子搬出の際に取りこぼした可能性が考えられる。



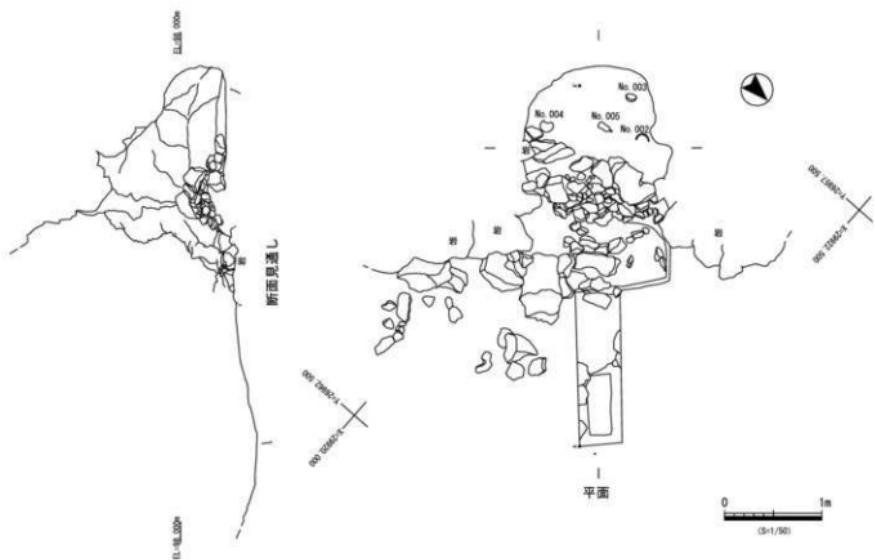
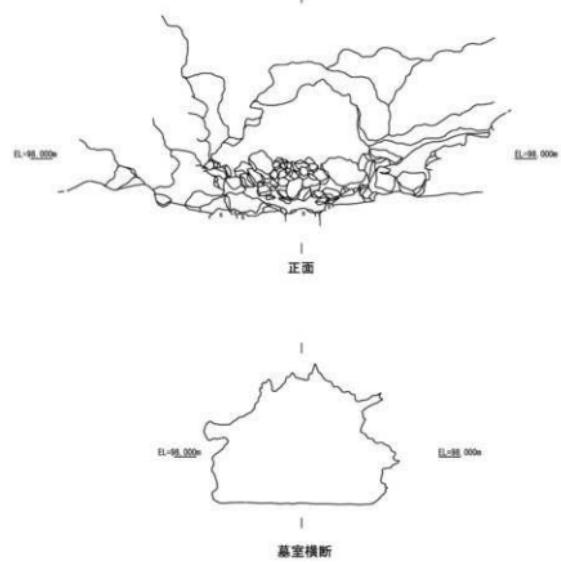
3号墓室内状況



3号墓底等確認状況



第V-10図 1号墓：断面見通し図・平面図・墓室断面・セクション図



第V-11図 3号墓：断面見通し図・平面図・墓室断面・セクション図

4. 遺物

今回の調査において確認された遺物は約 2020 点余であった。その中においては沖縄産無釉陶器がもっとも多く、次に沖縄産施釉陶器、本土産磁器と続いた後に近現代の遺物が見られる。また、錢貨などをはじめ、簪、円盤状製品、ボタン、ガラス製品等が出土している。

屋敷跡では、トレンチ 26 の南西側石敷き周辺で屋敷跡全体の 20%の遺物が出土し、そのうち沖縄産無釉陶器がトレンチ全体の 70%以上を占めていた。次にトレンチ 13 の溝状遺構 3 からの出土が多く、先ほどと同様にトレンチ全体の 80%以上を沖縄産無釉陶器が占めている。他にいわゆるスンカンマカイと称される底部焼などが出土している。また、屋敷跡の溝状遺構 1 からは陶磁器のほかに寛永通寶、ガラス瓶、イモガイ、鉄製品等が出土している。石柱の周辺からは沖縄産施釉の底部を素材とした円盤状製品が出土した。トレンチ 30 の溝状遺構 3 からは、錢貨が 4 枚付着する（永樂通寶 1 枚、寛永通寶 1 枚他 2 枚不明）状態で確認されているが、錢貨の方孔には紐状の繊維が残存する。また、付着する錢貨から外れたと思われる寛永通寶 1 枚も出土したほか、溝状遺構の底面からは沖縄産無釉陶器の甕が検出された。屋敷跡南西部の石敷き遺構においては、沖縄産陶器のほかに野村廣貫堂の薬瓶が遺構の上面において出土した。また、レンガが屋敷地の内外で出土しているが、屋敷地のどの建物（施設）などで使用されたのかを確認するには至らなかった。

遺物の器種に注目すると、屋敷跡等では沖縄産施釉陶器の碗がもっとも多く出土する。同碗の分類では家屋部について、Ⅲ類（白化粧+透明釉）のみであるが、屋敷跡全体では、Ⅰ類（釉薬単掛け）やⅡ類（内外面釉薬掛け分け）も認められ、特にⅠ類の出土量が増加する。一方、碗以外の器種については急須、瓶、皿、鉢などが少量出土する。沖縄産無釉陶器については、壺または甕の判別しがたい胴部片の出土がほとんどであるため、器種を断定し得る限りにおいては壺の出土が多い。また、本土産陶磁器では碗や皿などが多く見られた。アカムヌーは破片資料が多いため、すべての器種を断定することは困難であったが、水鉢などと思われる資料が確認されている。上記のほかにもプラスチック製ボタンやレンガ等が出土している。

屋敷地外においては、トレンチ 19 からの出土が最も多く、ここでも沖縄産無釉陶器が目立って出土している。屋敷地外の遺物は、屋敷地内の遺物内容と大きな差ではなく、屋敷内外の時期差は遺物を見る限りにおいて大差はみられなかった。

古墓より出土する遺物については、1 号墓からの遺物は少なく、崩落した礫の下から簪などが出土した。3 号墓では墓口や墓室内から沖縄産施釉陶器の碗、鉄釘、貝製ボタンなどが確認され、その他にも墓庭から人の歯と思われる骨が 1 点のみ検出されている。



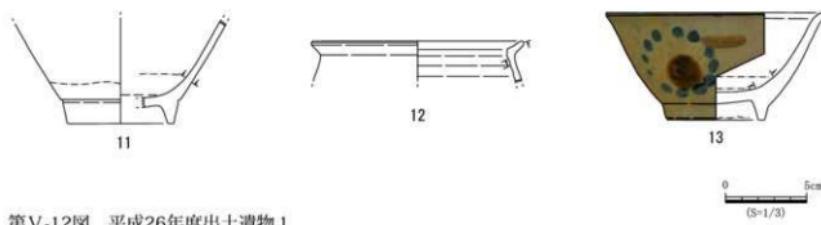
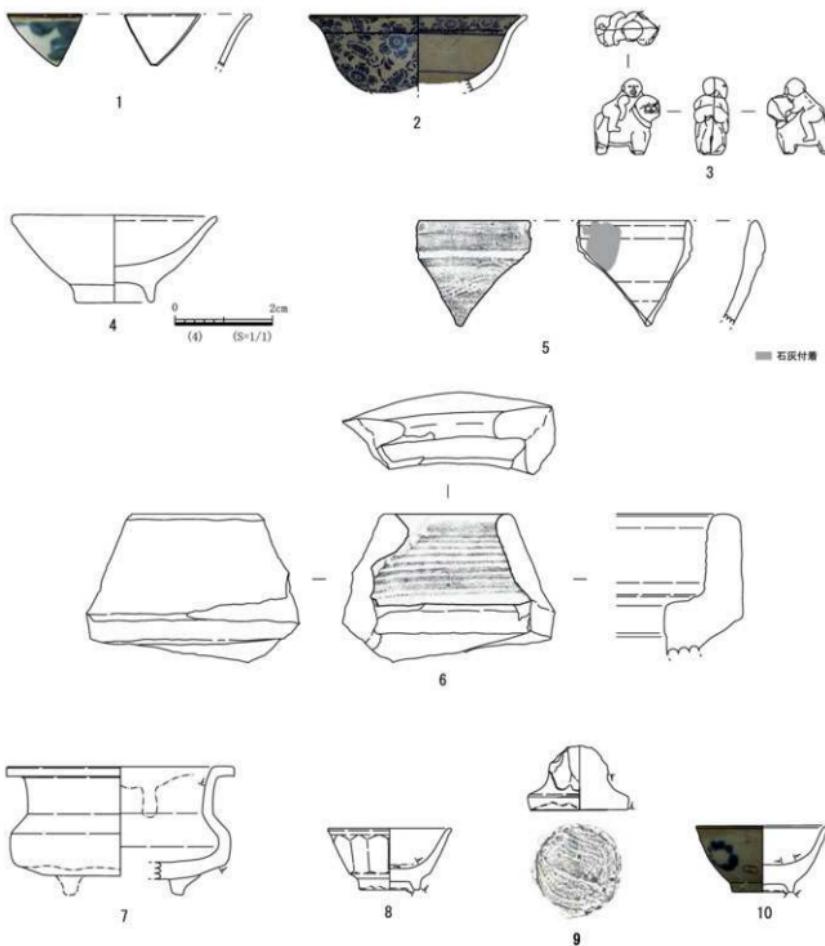
溝状遺構 3 遺物出土状況①



溝状遺構 3 遺物検出状況②

第V-1表 平成26年度出土遺物観察一覽

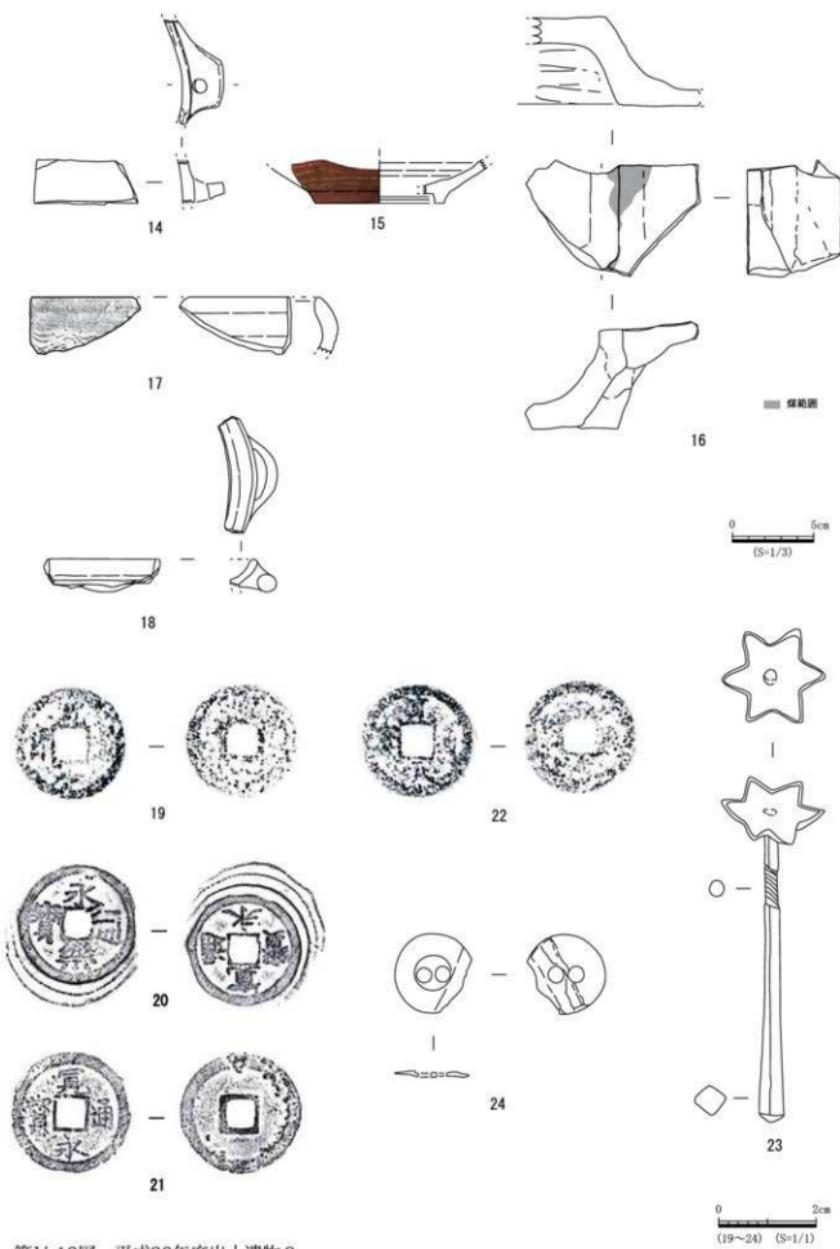
出荷番号	種類	器種	分類	形状	存在状況	色調	表面・底面・色調・文様・形態等の特徴	裏面・材質・焼成	釉色・施釉状況・入荷日	出土地
1	青花	瓶	N	口縁部	口径: (3.3) cm 底径: (3.3) cm	口縁部は施青花で、外面部には輪郭線および底面の草書体文字が施されている。	底面は白色の微細子。	底面は白色を呈す。口縁部に地色系の施釉を施す。	同敷物トレンチ15 2層	
2		瓶	-	口縁部	口径: (3.4) cm 底径: (4.7) cm	いわゆるエンターラインと呼ばれる形態。腹部は丸みを帯び、底面は平らである。外面部は施青花で、外面部に草書体文字、内面部には輪郭線と底面に施青花である。また、外面部に施青花の痕跡がある。	底面は良好。	内外面に透明釉が施される。底面焼け跡。	同敷物トレンチ13 1層 同敷物トレンチ13 1層 焼成窓内	
3	磁器	人形	-	一部欠損	高さ: 4.6cm 底面: 3.4cm	塑膠人形。その背中側に施青花の痕跡が確認されている。	透明釉が全体的に施されるが、底面は施青花が施されない。	透明釉が全体的に施されるが、底面は施青花が施されない。	同敷物トレンチ13 1層	
4	小瓶 (横口)	-	完形	高さ: 1.2cm 底面: 1.4cm 口径: 1.7cm	壺から直線的に立ち上がる變形。瓶面に外反する。	白色。	透明釉が全体的に施されるが、底面は施青花が施されない。	透明釉が全体的に施されるが、底面は施青花が施されない。	同敷物トレンチ13 1層	
5	内窓在用物 周辺	神	I-a	口縁部	口径: (4.4) cm 底径: (4.4) cm	口縁部は内窓を呈し、口周囲は灰状となる。腹部に施青花の文字が施されている。	底面は白色。	底面は白色。	同敷物グリッド12 美術	
6		不明	-	口縁部	口径: (6.7) cm 底径: (6.7) cm	口縁部の内窓は橢円形となる。腹部は施青花で、外窓に施青花の文字が施されている。	底面は白色。	底面は白色。	同敷物良上	
7	青伊	I-b	-	口縁一部部	口径: (11.4) cm 底径: (9.9) cm	口縁部は青字を呈し、周囲は底面。腹部は僅く膨らむ。3Mの脚を有す。	表面は淡黄白色。	白化焼後、口縫から腰部まで施釉が施される。	同敷物トレンチ11 1層 同敷物トレンチ11 1層 焼成窓トレンチ1手	
8		小瓶	II-B2	口縁部～底面	口径: (7.4) cm 底径: (3.9cm) 高さ: 3.6cm	周縁から底面に立ち上がり、口縁は幅広に開き、腹部は底面に立ち上がる。外窓に施青花の文字が施されている。	底面は灰白色でやや暗め。腹部は白色。	白化焼後に透明釉が施される。内窓見込み部にはアルミシートが貼られる。細かい買入あり。	同敷物トレンチ11 20cm~30cm	
9	片窓在用物 周辺	蓋付製品?	-	口縁部	口径: (14.9) cm 底径: (9.6) cm	「凸」字が施されている。下腹部は青字が施されるが、外窓に施青花の文字が施されている。底面は内窓で施青花である。	底面は淡黄白色。	下腹部以外の内窓に立上がり、腰部以下にバーホルトを施し、その後に透明釉が施される。	同敷物グリッドP15 II-F造痕 内窓	
10	片窓在用物 周辺	小瓶	III-B1 有天	口縁部～底面	口径: (9.2) cm 底径: (4.6) cm	腰部は膨らむ。ほぼ直線的に立ち上がる。底面は内窓で施青花である。見込み部は内窓で施青花である。	底面は灰白色。	白化焼後、腰部に立ち上がり、その腹側部に施釉がある。内窓見込み部にはアルミシートが貼られる。外窓に施青花があり、豊臣時代指揮官「丸」字が印字されている。	同敷物東支手手 丸広正泰手	
11		瓶	I-1イ	底面	口径: (10.4) cm 底径: (6.4) cm	腰部は膨らむ。内窓は「凸」の字形で形成される。	底面は灰白色。	内窓ともに腰下部まで施釉が施される。	同敷物I-レンチ1 90cm~100cm	
12		瓶	I-1II	口縁部	口径: (13.0) cm 底径: (8.6) cm	腰部は「凸」の字形で形成される。	底面は灰白色。	内窓の口縁部底面に施釉が非常に厚く、内窓に施釉が施される。	同敷物トレンチ19底面 見込み~10cm	
13	瓶	III-B	完形	口径: (9.6) cm 底径: (6.0) cm	腰部は膨らむ。腰部以下に丸を貫ける。外窓に施青花の文字が施される。	底面は灰白色。	全体的に白化焼がなされるが、見込み部は内窓の口縁部が施釉がされる。買入は見られない。	同敷物3号墓		
14	火炉	-	X	口縁部	口径: (2.3) cm 底径: -	丸みを帯びるように立ち上がる腰部と膨らむ底面。外窓に施青花の文字が施されている。	底面は白色。	に似た施釉色で、底面は白色。	同敷物トレンチ12 10cm~20cm	
15	火炉	I	底面	口径: (2.7) cm 底径: (2.6) cm	外窓に開けようとして立ち上がる腰部。外窓はナマテ窓であるが、内窓は施釉が施されており、腰部は丸みを帯びて、底面は内窓のみで内窓部を施釉する。	底面は白色。	外窓には白土が帯状に施釉が施される。	同敷物トレンチ11 1層		
16	アカムニー	火炉	V	口縁部	口径: (2.6) cm 底径: -	ベテ状の底部の腰部から、やや外傾するなどして腰部が立ち上がり、腰部は内窓のみで内窓部を施釉する。	底面は白色。	に似た施釉色で、底面は白色。	同敷物良土手	
17	鉢	I-a	口縁部	口径: (3.5) cm 底径: -	腰部は丸みを帯びて、内窓は「凸」の字形で形成される。	底面は白色。	腰部へ施釉色。	同敷物I-1層		
18	鉢	II-a (中・小)	口縁部	口径: (1.7) cm 底径: -	腰部は「凸」の字形に扁平化し、口縁部は「凸」の字形を呈する。	底面は白色。	腰部へ施釉色。	同敷物II手土手		
19	黒水道便	-	完形	内径: 23mm 外径: 24mm 高さ: 1.9cm 底面: 19mm 口径: 19mm 重量: 12.15g	手縫縫合で繋げられているが、「萬」(一萬)の文字が施されている。いわゆる二周の黒水道便で1989年以前の鉢。	-	-	同敷物底状痕: 1層 道窓内之西		
20	被質	木板活版 (和行活版)	-	完形	内径: 23mm 外径: 24mm 高さ: 1.9cm 底面: 19mm 口径: 19mm 重量: 12.9g (4枚)	4枚行青、4枚左右縫合しておらず、絞が付いている。内窓は「萬」の字形で施青花である。	-	-	同敷物トレンチ30	
21		黒水道便	-	完形	内径: 23mm 外径: 24mm 高さ: 1.9cm 底面: 19mm 口径: 19mm 重量: 12.67g	手縫縫合で繋げられており、「萬」が施されている。	-	-	同敷物トレンチ30	
22	被質	黒水道便	-	完形	内径: 23mm 外径: 24mm 高さ: 1.9cm 底面: 19mm 口径: 19mm 重量: 12.11g	手縫縫合で繋げられており、「萬」が施されている。	-	-	同敷物トレンチ3 1層	
23	管	本管	-	完形	最大外径: 1.1cm 内径: 1.0mm 長さ: 12mm 底面: 1.0mm 口径: 1.0mm 重量: 4.03g	男性骨。ムディの断面は円筒となるが、骨は方角的骨を呈す。全体的に縫合跡がいくつあるが、ムディの筋肉痕に見られる。管が出来たときの元の骨の形を示す。	骨頭部	-	1号墓内 露 (和石?) 下	
24	ボタン	-	-	一般灰陶	透光写真: 壁面の半分が発掘する。次ぎ回は廻縫により外側に向けて置くくなる。	表面	-	-	3号墓	



第V-12図 平成26年度出土遺物 1



图版V-4 平成26年度出土遺物 1



第V-13図 平成26年度出土遺物 2



图版V-5 平成26年度出土遺物 2

第V-2表 白磁集計表

出土位置・層位		種類	碗	不明	合計
			不明	不明	
			口	胴	
屋敷跡	トレンチ	No.2 一括		1	1
		No.14 一括		1	1
		No.29 3層	1		1
道路②	北側溝状遺構	トレンチ No.19 一括		1	1
合計			1	3	4

第V-3表 本土産陶器集計表

出土位置・層位		種類	薩摩焼?	產地不明					合計
				不明	碗	碗	碗or小碗	不明	
					胴	口	胴	胴	
屋敷跡・家	トレンチ	No.6 表土	1					1	2
		No.8 一括						1	1
		1層						1	1
屋敷跡	ビット3	一括							1 1
		溝状遺構	No.12 一括					1	1
		No.2 一括		1					1
	トレンチ	No.3 表土						1	1
		No.14 一括					2	2	
		No.29 2層					1	1	
		表土				1			1
道路1	トレンチ	No.1 一括			1			2	3
道路2	トレンチ	No.19 一括					1		1
畑跡	トレンチ	No.15 扩張耕作土		1				1	2
		No.23 一括					1		1
		No.24 一括				1	1		2
		表土					1		1
		合計		2	1	1	1	15	21
				1					22

第V-4表 本土産陶器?集計表

出土位置・層位		種類	產地不明				合計
			小壺	不明	不明	不明	
				口	口	胴	
屋敷跡・家	溝状遺構1	1層			1	1	2
		2層				1	1 3
	トレンチ	No.9 扩張 表土			1		1
		表土				1	1
屋敷跡	トレンチ	No.2 一括	1				1
		No.5 一括		1	1		2
		表土		5	7		12
		合計		1	6	8	20

第V-5表 本土産磁器集計表

第V-6表 沖繩產無釉陶器集計表

第V-7-1表 沖縄産施釉陶器集計表 1

第V-7-2表 沖縄産施釉陶器集計表2

第V-8表 アカムヌー集計表

出土位置・層位	種類	範?	縄			縄垂			縄			角頭			角頭?			火印			面積不明			合計	
			I			II			III			IV			I			II			V			合計	
			直	口	口	平・大	中・小	直	口	直	口	直	口	直	口	直	口	直	口	直	口	直	口	直	
横状遺構1 1層	No.6	表土																							1
	No.6	粘土																							2
	No.6	粘土																							2
	No.7	粘土																							1
	No.7	粘土																							1
	No.9	表土																							1
	No.9	粘土																							1
	No.9	粘土																							1
表土																									1
1層																									1
（消却中層位不明）																									1
	No.2	一括																							1
	No.11	一括																							5
	No.13	1層																							5
	No.13	1層																							5
	No.27	一括																							2
	No.28	一括																							6
	No.30	一括																							17
溝状遺構3 2層	No.2	一括																							1
	No.3	一括																							1
	No.5	1層																							10
	No.11	1層																							5
	No.12	一括																							9
	No.12	半歳																							1
	No.13	1層																							1
	No.14	表土																							1
	No.26	一括																							1
	No.29	2層																							1
	No.29	3層																							1
	No.29	一括																							3
	No.29	2-3層																							1
表土																									2
1層																									4
-一括																									6
道筋1	No.1	一括																							9
	No.1	西側半歳																							1
	No.1	表土																							6
1層																									9
道筋3	No.19	1層																							1
	No.19	一括																							1
	No.15	表土																							1
	No.15	粘土																							1
	No.15	粘土																							1
	No.15	粘土																							1
	No.17	1層																							2
	No.23	一括																							4
	No.23	粘土																							4
	No.24	一括																							5
	No.25	一括																							7
表土																									5
総合資料		横状遺構A-1層																							5
		横状遺構A-一括																							5
		横状遺構3-1層	No.11	1層																					1
		横状遺構3-1層	No.11	一括																					1
出土地不明																									1
	合計																								178

第V-9表 石器・石製品集計表

出土位置・層位	種類	石器			合計
		石器	磨石	小刀	
		月	月	片	
横状遺構1	No.29	15	1	1	1
横状遺構2	No.19	15	1	1	1
	合計	30	2	2	4

第V-10表 瓦集計表

出土位置・層位	種類	瓦			合計
		瓦	瓦	木	
		月	月	片	
横状遺構1	No.28	15	1	1	1
横状遺構2	No.29	15	1	1	1
	合計	30	2	2	4

第V-11表 レンガ集計表

出土位置・層位	種類	レンガ			合計
		レンガ	レンガ	レンガ	
		月	月	月	
横状遺構1	No.20	4	1	1	6
横状遺構2	No.26	1	1	1	3
	合計	5	1	1	7

第V-12表 円盤状製品集計表

出土位置・層位	種類	円盤			合計
		円盤	円盤	円盤	
		月	月	月	
横状遺構1	No.20	1	1	1	3
横状遺構2	No.29	1	1	1	3
	合計	1	1	1	3

— 51 —

第2節 平成27年度調査

1. 調査区の設定

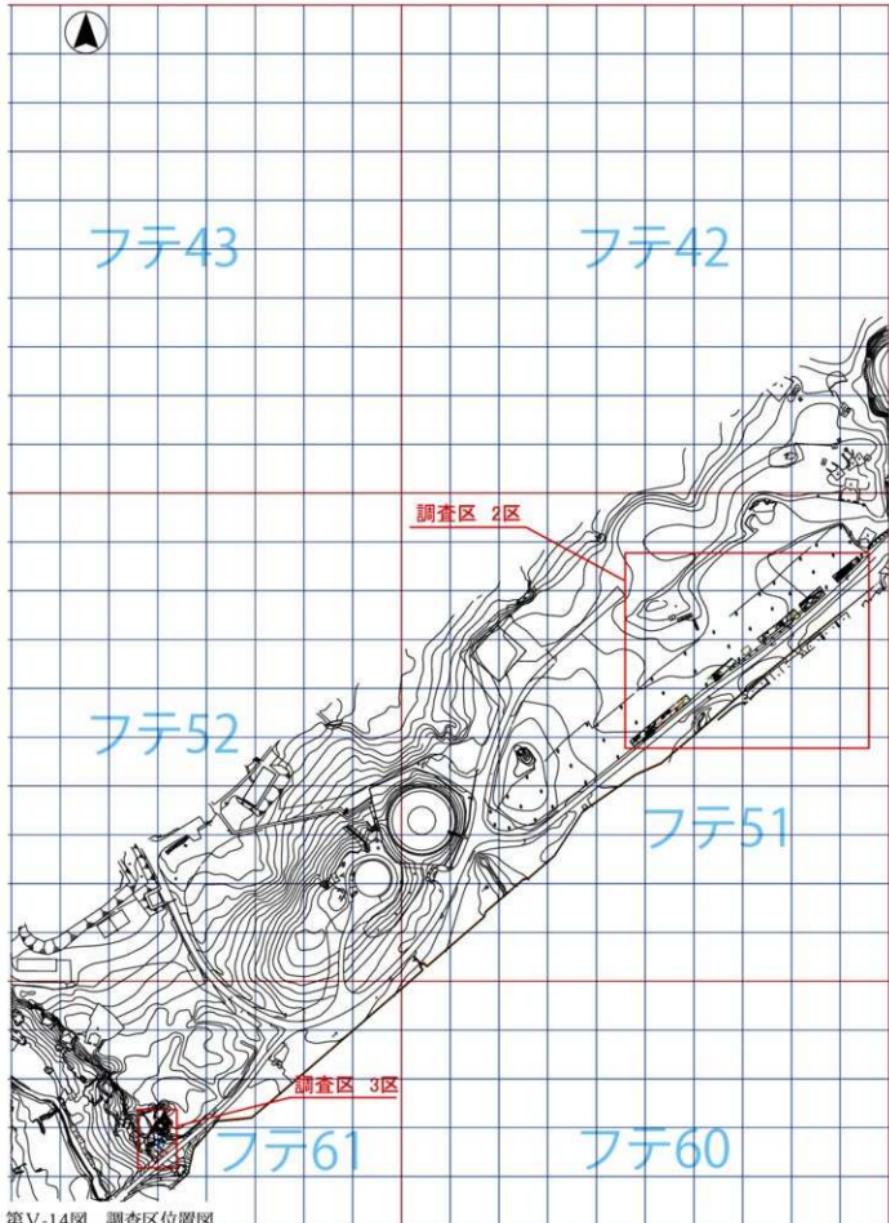
巡回道路移設工事予定地における緊急発掘調査については、過年度の試掘調査の成果及び道路線形に係る図面等を精査し、工事によって埋蔵文化財に影響を与える恐れのある範囲を特定したうえで調査対象地に便宜上の地区名として1、2地区を付した（第V-14図）。なお、1地区が所在する地点は赤道シキロ一流域古墓群の縁辺部に位置し、2地区が所在する地点は神山後原丘陵古墓群の縁辺部に位置する。また、平成16年度に宜野湾シリガーラ流域古墓群の分布調査（宜野湾市教育委員会2007）を実施した際に改めて把握された古墓2基（64・65号墓）周辺も道路線形上に位置していたため、当該地を3地区として調査区を定めた（第V-14図）。当該地区的調査区は主に墓庭などが対象となったが、墓庭に隣接する斜面地において多くの礫が散乱している状況が確認されたため、庭開いの石積みが崩壊したことなども想定しつつ、礫群の下位に他の遺構等が所在するかの確認も含めてトレントを設定した。なお、調査区設定に際しては、調査区予定地の樹木等を対象地から除外して設定をした。

2. 層序

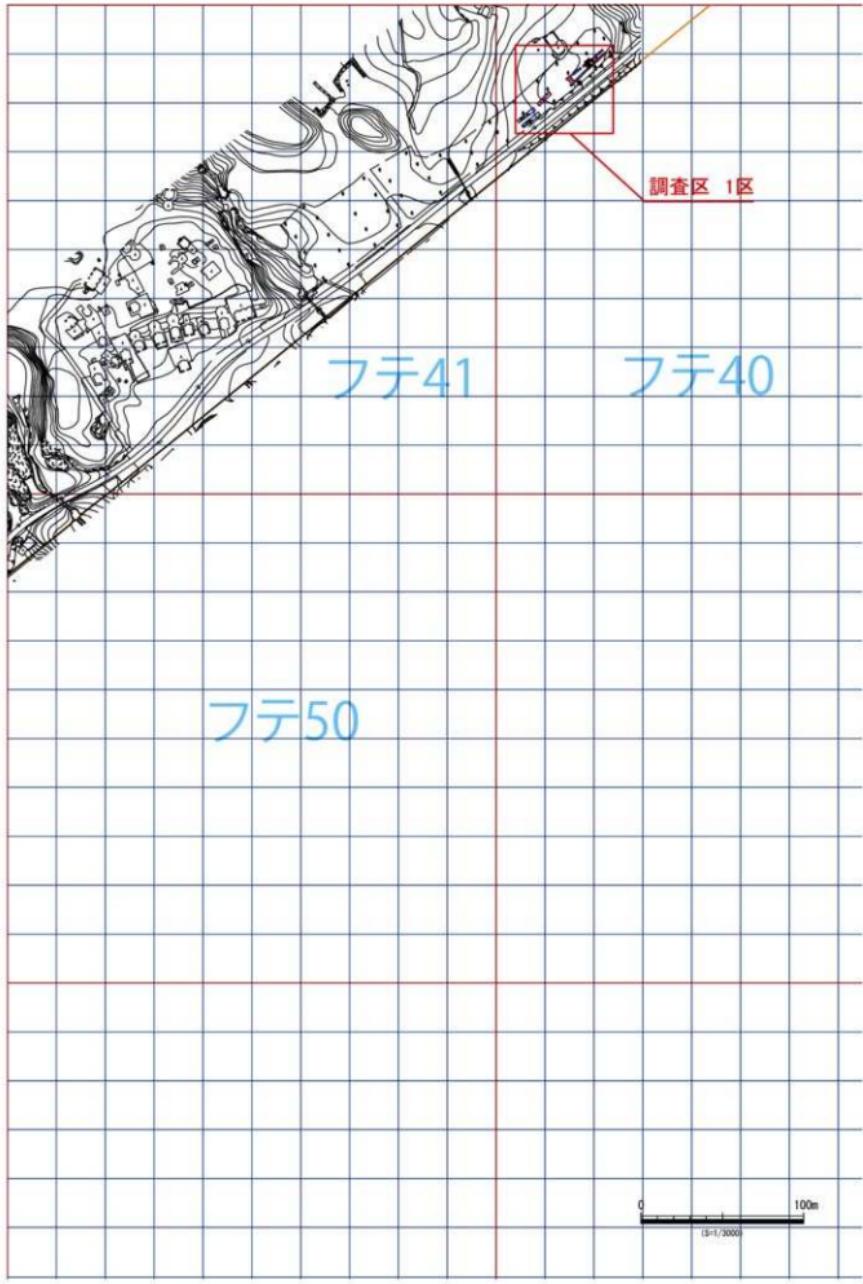
平成27年度における緊急発掘調査において1地区及び2地区で確認された基本的な層序は、大きく分けて表土層、基地接收後の造成層、旧耕作土層などであった。なお、基地接收後の造成に関しては、基地建設に係る大規模な造成及び基地建設後の道路整備や植樹等の小規模な造成がある。今回の調査対象地においては、大規模な造成に関わる層はほとんど確認されず、主に既存の巡回道路やガジュマルなどを植樹した際になされた小規模な造成層が見受けられた。また、旧耕作土層については、戦後の黙認耕作などの可能性も考えられるが、巡回道路や植樹などがなされている地域でもあるため、黙認耕作にかかる耕作土層とは断定できず、概ね基地接收前の旧耕作土であることが推察された。一方、3地区の墓庭においては、表土層と造成層に大別され、表土層下面において厨子を主体とする遺物が多く見られ、造成層においては遺物が散見される程度であった。

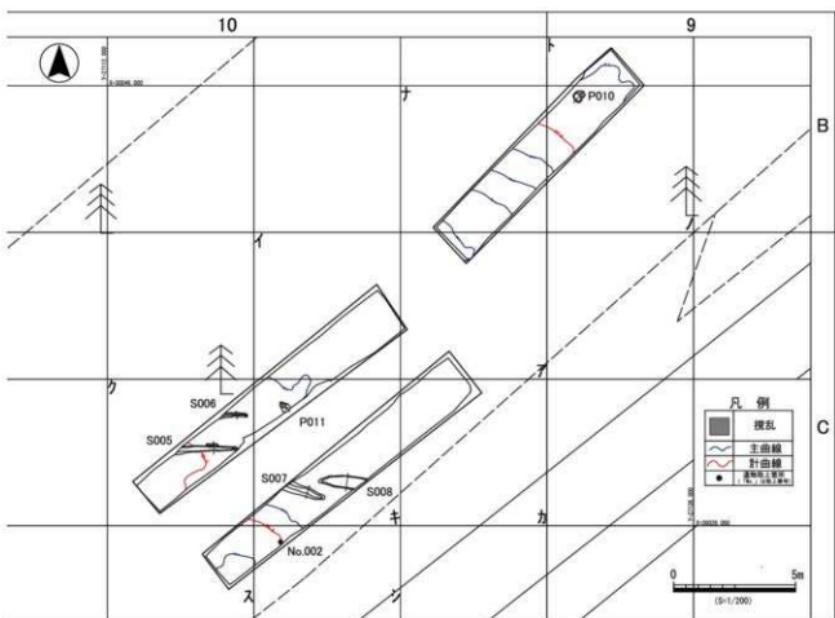
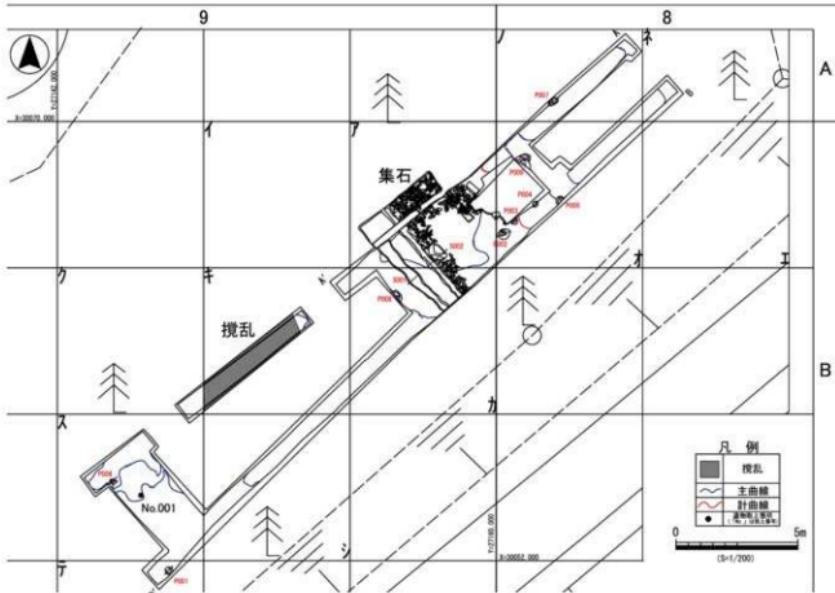
3. 遺構

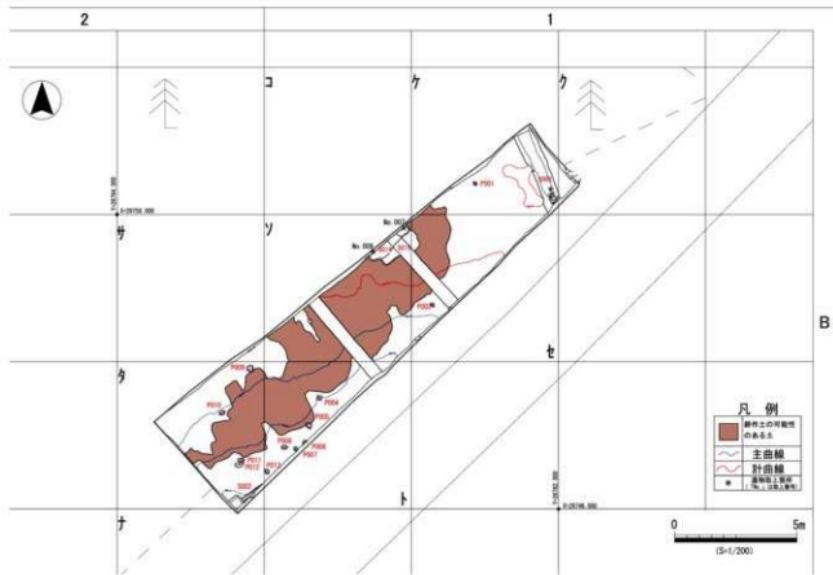
平成27年度の調査において確認された1、2地区の主な遺構はピット、溝状遺構、土坑、区画跡等があった。1地区ではピットや溝状遺構が主に確認され、特に溝状遺構の中には基地接收前後まで使用されていたと思われる道跡と想定される遺構（第V-23図）が見られた。その他の溝状遺構やピットなどは耕作に関わる可能性がある。2地区ではピットや溝状遺構のほかに土坑（第V-25、28、29図）や区画跡（第V-26・27図）と思われる遺構が確認されており、いずれも耕作に関する遺構の可能性が考えられる。また、3地区においては、古墓に関わる遺構の検出が想定されたが、古墓自体が一部崩落している状況や周辺地改變の影響により古墓関連の施設（遺構）が崩れたことが予想される。調査対象の古墓は崩落の危険性があり、墓室内の調査は断念したため、古墓に関わる遺構の詳細は把握し得なかった。



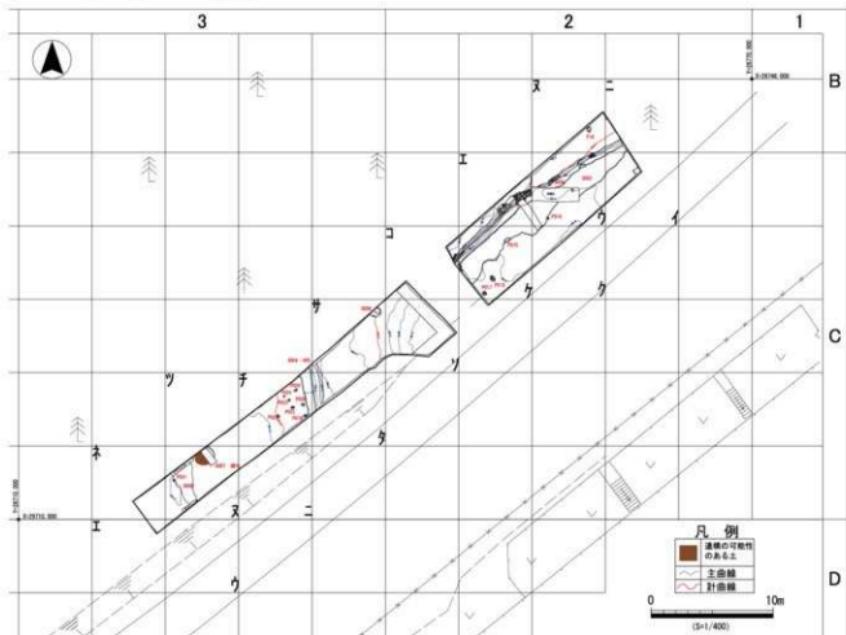
第V-14図 調査区位置図



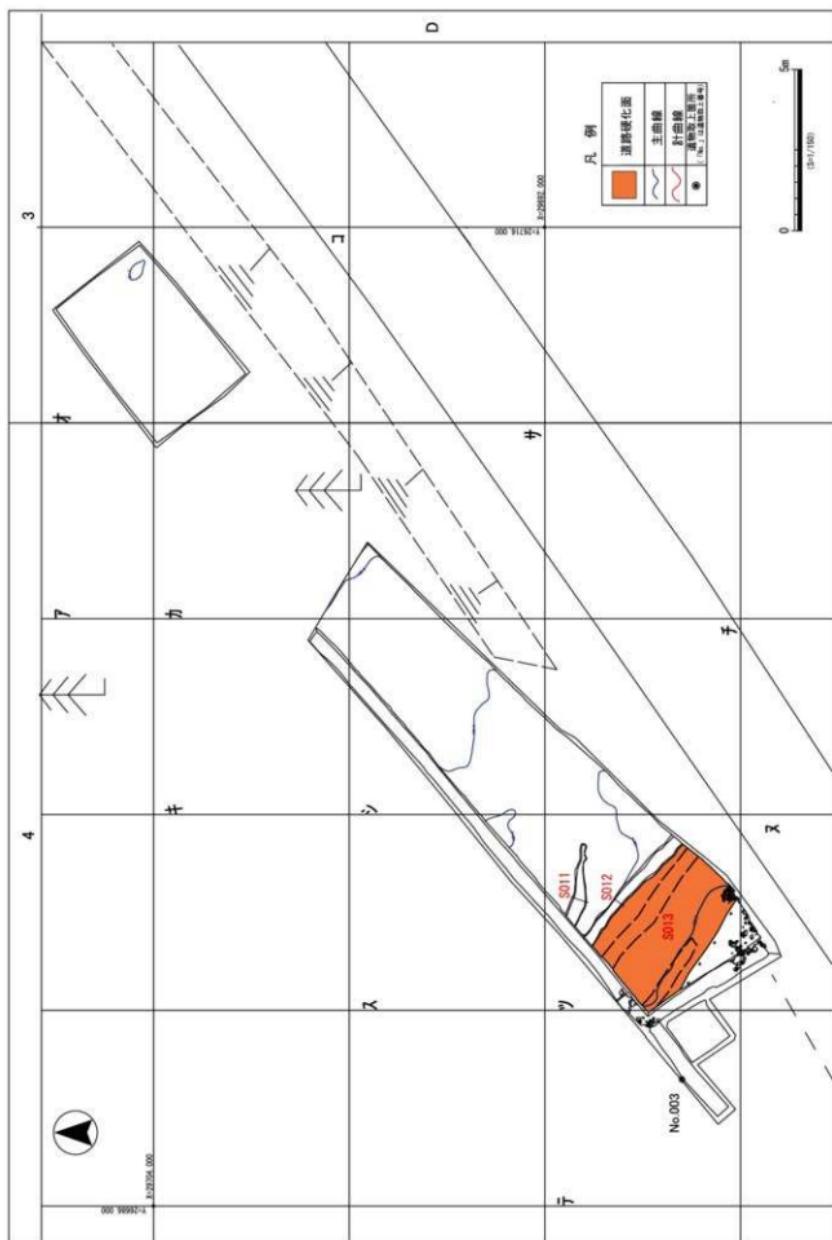




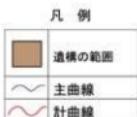
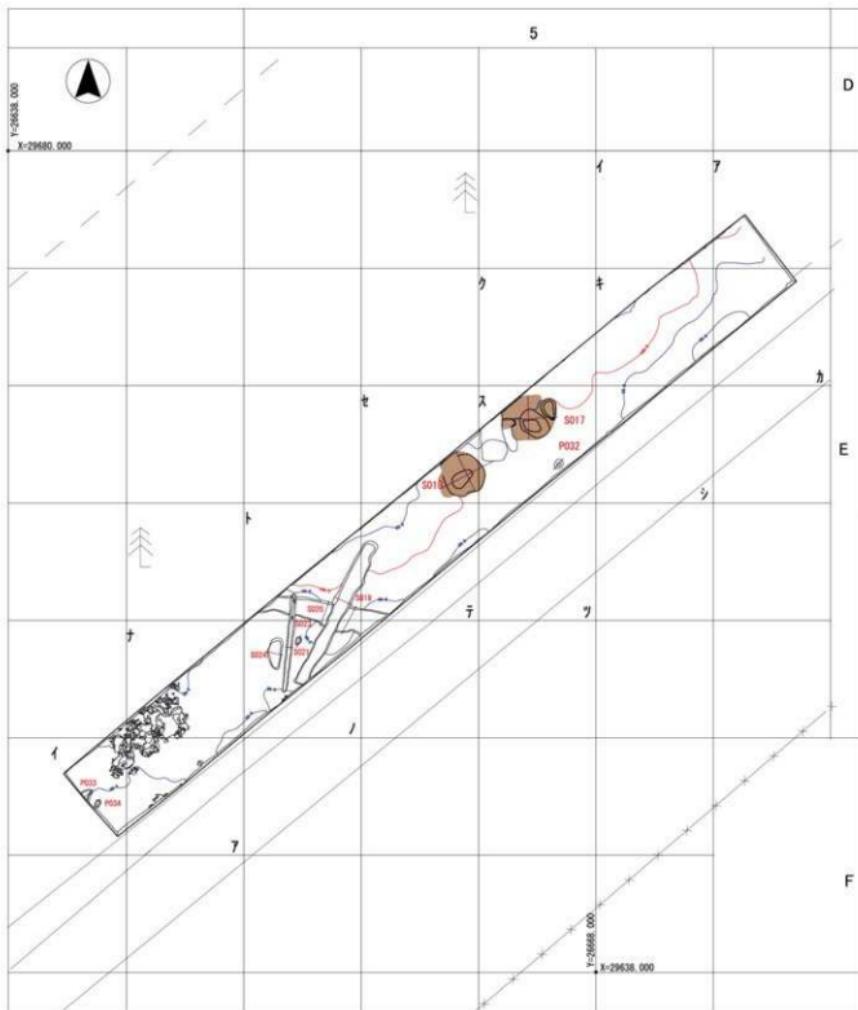
第V-17図 2区-1 平面図



第V-18図 2区-2 平面図

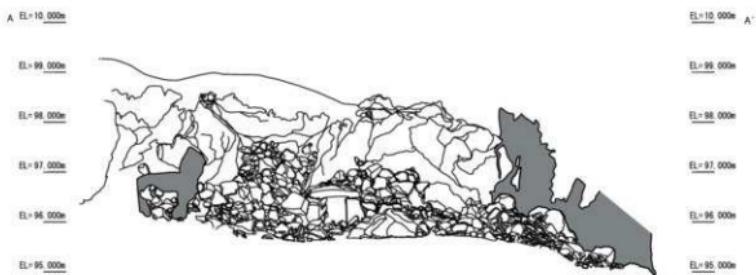


第19回 2区・3~4平面図

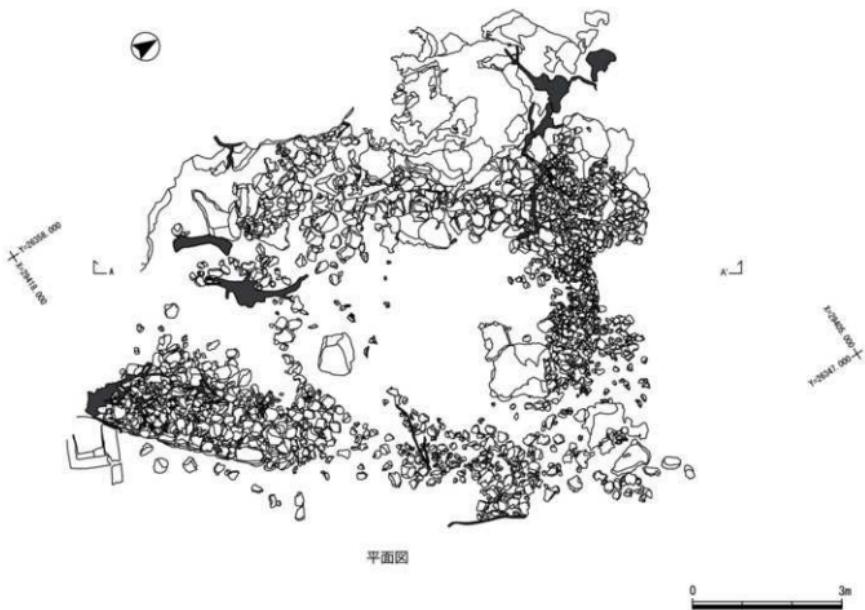


0 10m
(3-1/250)

第V-20図 2区-5 平面図



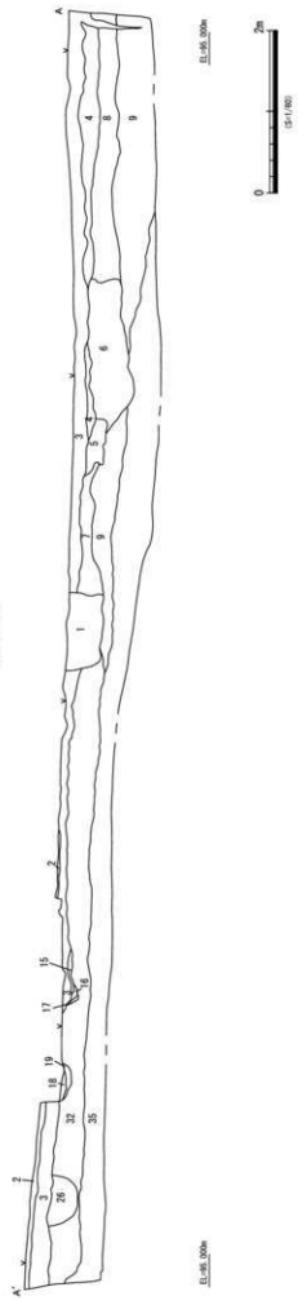
立面図



0 3m
(3m/1/100)

第V-21図 3区64号墓 立面図・平面図

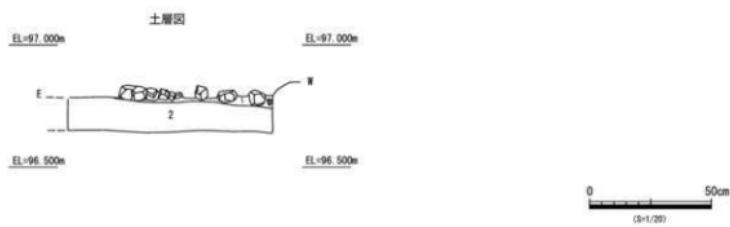
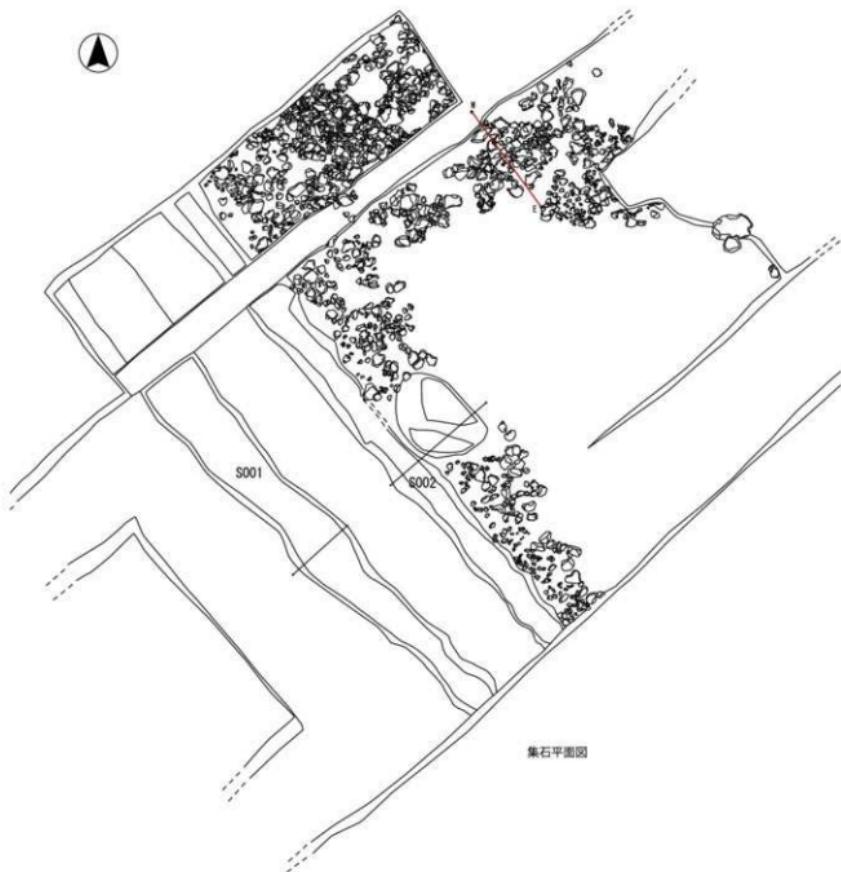
E:48.90m



E:46.90m



第V-22図 1区・1・1区・2 壁面土層図

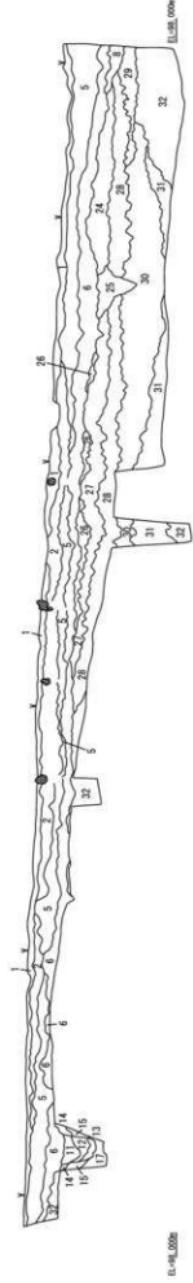


第V-23図 1区-4集石平面図・土層図

東壁

E=129.000m

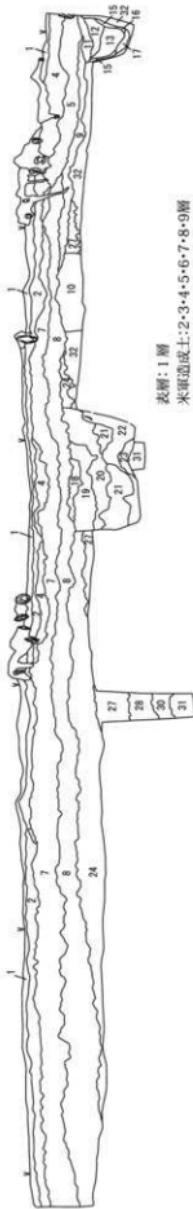
E=109.000m



西壁

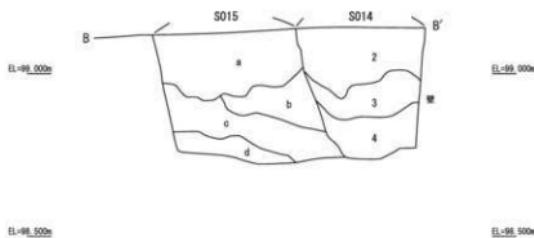
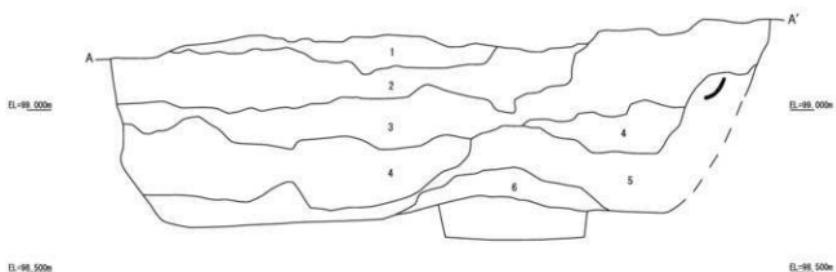
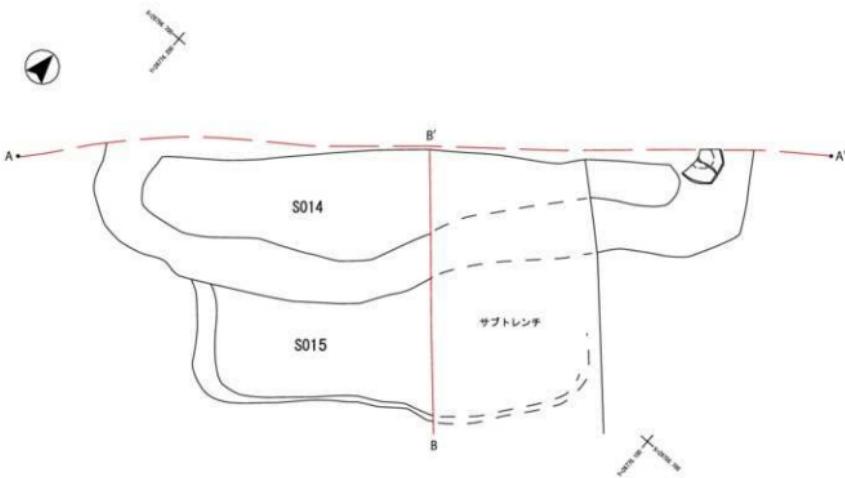
E=129.000m

E=109.000m

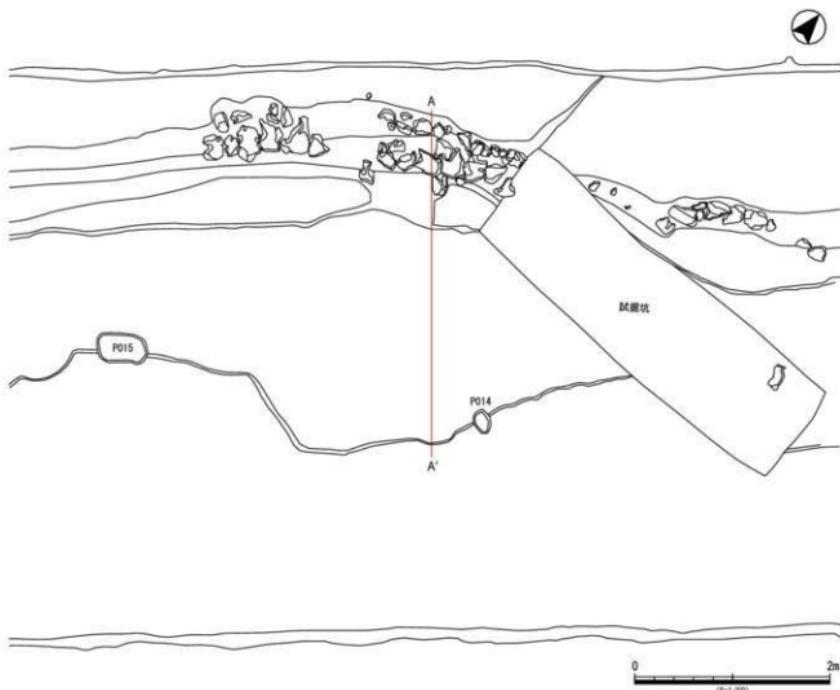


表層:1層
米穀道底上:1・2・3・4・5・6・7・8・9層
道側分離土:10層
SD01道側削上:11・12・13・14・15・16・17層
耕作上:12・26・27・28層
P06道側削上:25層
旧耕作上:29・30層
地底:31・32層

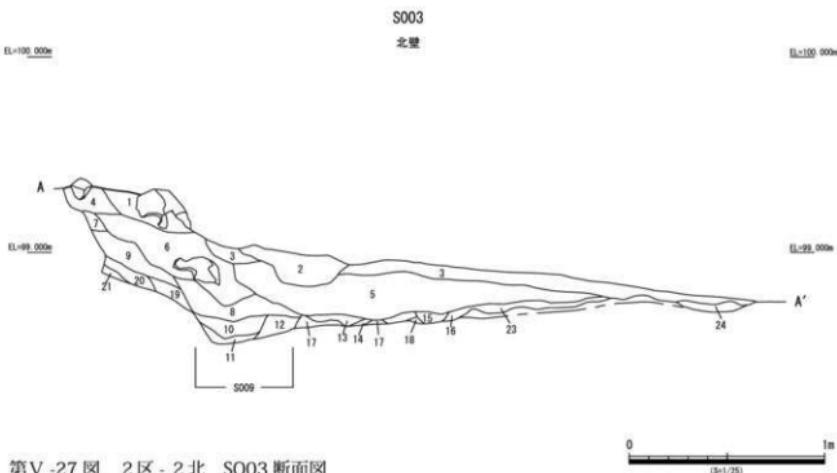
第V-24図 2区-1 壁面土層図



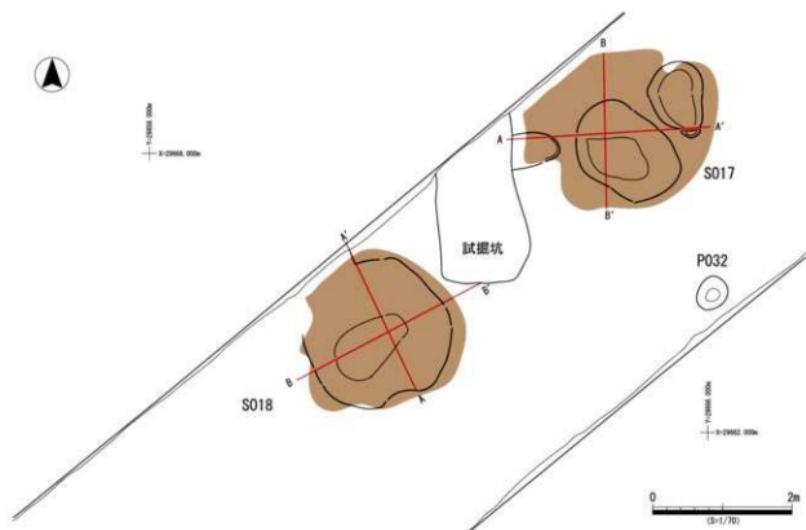
第V-25図 2区-1 S014・15断面図



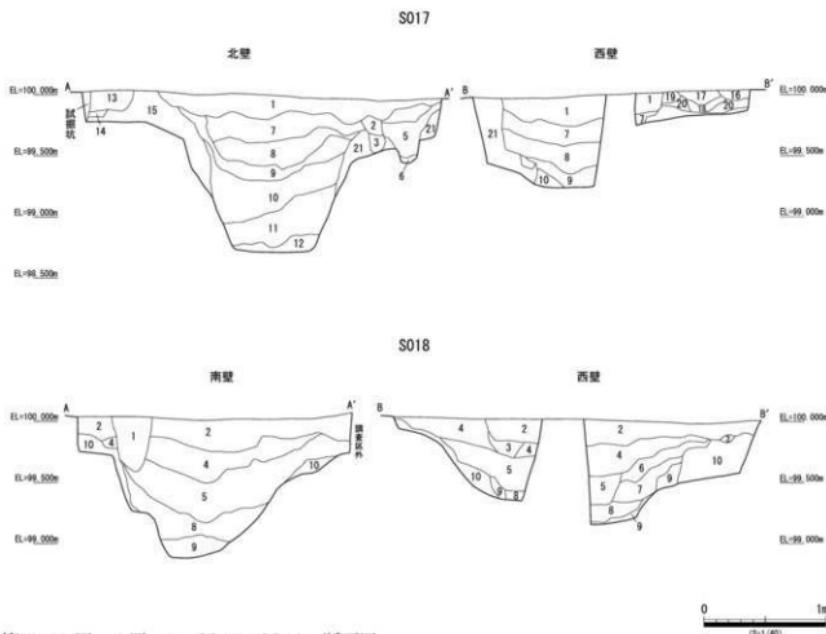
第V-26図 2区-2北 SO03平面図



第V-27図 2区-2北 SO03断面図



第V-28図 2区-5 SO17・SO18 平面図



第V-29図 2区-5 SO17・SO18 断面図

4. 遺物

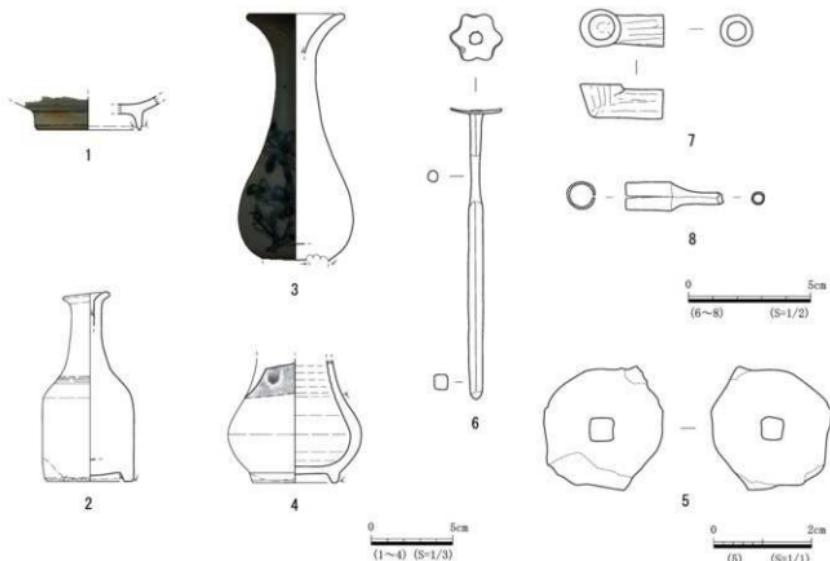
平成 27 年度の調査において得られた出土遺物は 760 点ほどが確認されている（第 V - 14 表）。主な遺物としては青花、本土産陶磁器、沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器、アカムヌー、瓦、錢貨、キセル、簪などが挙げられる。その中で、最も多いのは沖縄産施釉陶器（約 43.0%）で、次いでアカムヌー（約 21.1%）となり、沖縄産無釉陶器（約 14.2%）などが続く。また、調査区ごとでは 1 地区で 79 点（約 10.4%）、2 地区で 628 点（約 82.6%）、3 地区で 48 点（約 6.3%）、出土地不明 5 点の出土割合となっている。1 地区では沖縄産施釉陶器やアカムヌーが多く得られているが、地区内の南側での出土が目立ち、統いて多い瓦は逆に北側において比較的多く出土する。2 地区においても、沖縄産施釉陶器やアカムヌーが優位に出土しており、地区内の中央付近で最も多く得られている。一方の 3 地区においても沖縄産施釉陶器が最も多く出土しているが、アカムヌーなどは得られておらず、錢貨やキセルなどが副葬品として検出されており、調査地における過去の土地利用状況が遺物構成に表れている。



第V-30図 遺物構成グラフ

第V-14表 平成 27 年度出土遺物観察一覧

調査番号	種類	形態	分類	部位	法量	説明・特徴	測定・質材・ 種類	諸色・施釉状況・買入等	出土場
1	青花	碗	不明	底面	口徑 6.4cm	青白釉を呈す。裏面は繊維が残る。 底面は丸い形状で、口縁はフック状に曲く。裏面には何らかの文様が施される。	青白釉を呈す。裏面は繊維が残る。 底成は良好。		25E-5・2層
2	沖縄産施 釉陶器	瓶	I 口	完存	口徑 7.8cm 高さ 11.6cm 底面 5.2cm	青白釉から網状口縫は直角的で立ち上がる青白釉で、口縫はフック状に曲く。裏面には繊維が残る。 外底面に落書きが見られる。	青白釉から網状口縫は直角的で立ち上がる青白釉で、口縫はフック状に曲く。裏面には繊維が残る。 外底面に落書きが見られる。		3E 斜面トレンチ
		瓶	口縫部 ～底面		口徑 6.0cm 高さ —	青白釉から網状口縫は直角的で立ち上がる青白釉で、口縫はフック状に曲く。裏面には繊維が残る。 外底面に落書きが見られる。	青白釉から網状口縫は直角的で立ち上がる青白釉で、口縫はフック状に曲く。裏面には繊維が残る。 外底面に落書きが見られる。		3E 斜面トレンチ
3	青花	瓶	～	網縫 ～底面	口徑 5.2cm	青白釉を施した大口徑の瓶で、底面には落書きがある。裏面には落書きがある。	青白釉を施した大口徑の瓶で、底面には落書きがある。裏面には落書きがある。		3E 斜面トレンチ
4	青花	瓶	～	網縫 ～底面	口徑 5.2cm	青白釉を施した大口徑の瓶で、底面には落書きがある。裏面には落書きがある。	青白釉を施した大口徑の瓶で、底面には落書きがある。裏面には落書きがある。		3E 斜面トレンチ
5	錢貨	鉢	～	完存	外径 23mm 内径 6mm 厚さ 2.24mm	全体が厚い頭に覆われており、底板不明。			3E-1 層
6	簪	本簪	～	完存	最大長 11.8 幅大巾 0.4cm 幅大厚 0.4cm 重さ 20.74g	男性用。ムディ頭は円筒状となり、單は方形頭を呈す。全般的に磨耗してあり、ムディ頭の部分は削減し、先端部は丸みを帯びる。	青銅製	カブ形狀は鹿赤の先端が尖った花札。	3E-64号墓 島庭東側1層
7	簪	～	～	纏首	大正外径 1.5cm 幅大巾 1.2cm 幅大厚 1.3cm 重さ 0.76cm 小口内径 1.4cm 纏首高 0.77g	纏首は細長く、小口は幅が大きくなる。小口の内側には鋸歯状の縦溝があり、小口の奥に巻まっていた土から黒が0.07g落ちる。	青銅製	カブ形狀は鹿赤の先端が尖った花札。	3E 表探
8	簪	～	～	纏首	横口大 頭 最大厚 最厚部 後口径 重量	横口頭は小口となり、小口は幅が大きくなる。小口の内側には鋸歯状の縦溝があり、小口の奥に巻まっていた土から黒が0.07g落ちる。	青銅製		3E-1 層



第V-31図 平成27年度出土遺物



図版V-6 平成27年度出土遺物

第V-15-1表 沖縄産施釉陶器集計表1

第V-15-2表 沖縄産施釉陶器集計表 2

第V-16表 先史集計表

部位	不明	合計
出土位置・層位	銅	
2区-1 1層	1	1
2区-2 1層	1	1
2区-4 2層	4	4
合計	6	6

第V-18表 本土産陶器集計表

部位	产地 不明			合計
	碗	小瓶	銅	
出土位置・層位	口	口	銅	
1区-4 1層		1	1	
1区-5 2層	1	1		
1区-7 2層		1	1	
切土遺構 S003 1層	1	1	2	
2区-2 1層	1	2	3	
2区-3 2層	3	3	8	
2区-4 2層	1	1	1	
2区-5 2層	1	1	1	
合計	2	1	10	13

第V-17表 青花集計表

部位	不明	合計		
底	口	銅	底	合計
出土位置・層位				
2区-2 1層	2	2	1	5
2区-4 2層		1		1
2区-5 2層	1	3	1	5
合計	1	2	6	11

第V-19表 本土産磁器集計表

部位	肥前			肥后?			磁器產			不明			合計
	小瓶	不明	碗	底	口	銅	銅	口~底	口	口~底	口	底	
出土位置・層位													
1区-2 1層													
1区-6 3層													
1区-7 2層													
1区-8 2層													
2区-1 濃6 S001 5層													
2区-2 切土遺構 S003 1層													
2区-2 1層													
2区-3 2層													
2区-4 2層													
2区-5 濃12 S020 2層													
合計	2	1	10	13	1	1	1	1	1	1	1	1	52
	1	2	3										

第V-21表 銭貨集計表

部位	寛永通寶	一錢	不明	合計
底	元形	元形	元形	
出土位置・層位				
1区-5 1層	-	1		1
1区-8 2層	-	1	1	2
2区-4 1層		1		1
3区 1層		1	1	2
合計	1	1	2	4

第V-22表 瓦集計表

部位	平瓦	不明	合計
端部	片	片	
出土位置・層位			
1区-2 1層	1層		4
2区-2 2層	2層	1	5
1区-3 2層	2層		2
1区-7 2層	2層		2
1区-8 2層	2層		2
2区-1 濃6 S001 1層	1層	1	1
2区-8 3層 S004 1層	1層	1	2
切土遺構 S003 1層	1層	2	2
2区-4 4層	4層		6
2区-5 濃12 S020 2層	2層		1
合計	7	27	34

第V-20表 アカラムー集計表

部位	急須			火鉢			火炉?			湯呑不明			合計
	I	I	III	III	a		把手	銅	底	突起	口	銅	
出土位置・層位	口	口	口	口	口								
1区-1 1層													
1区-2 2層							2		2				
1区-5 2層							1		1				
3層							1		1				
1区-7 1層 S005	1	1	1	1	1	1							
2区-7 2層							3		3				
3層							1		1				
1区-8 2層	1	1	1	1	1	1	6		7				
土坑2 S014 5層							2		2				
2区-1 濃6 S001 1層							5		6				
1区-2 1層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-2 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-3 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-4 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-5 濃11 S019 1層	1	1	1	1	1	1	2		2				
2区-6 濃12 S020 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-7 2層	1	1	1	1	1	1	9		11				
2区-8 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-9 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-10 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-11 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-12 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-13 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-14 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-15 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-16 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-17 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-18 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-19 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-20 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-21 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-22 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-23 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-24 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-25 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-26 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-27 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-28 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-29 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-30 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-31 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-32 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-33 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-34 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-35 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-36 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-37 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-38 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-39 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-40 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-41 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-42 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-43 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-44 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-45 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-46 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-47 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-48 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-49 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-50 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-51 2層	1	1	1	1	1	1	1		1				
2区-52 2層	1	1</b											

平成26年度 基本層序

I 層:表層

II a層:米軍造成

II b層:米軍道路

II c層:米軍造成による盛土

III a層:黙認耕作土

III b層:黙認耕作土に伴う溝埋土

III c層:黙認耕作土時盛土

IVa層:旧耕作土

IVb層:旧表土

IVc層:里道?

Va層:屋敷跡造成層(全体的にみられる)黄褐色シルト 粘性弱い

Vb層:屋敷跡造成層(屋敷跡南西部にみられる)黄褐色シルト Vaより強い

Vc層:屋敷跡造成層(盛土遺構外側にみられる)黄褐色シルト 粘性なし

Vla層:家屋部造成層 砂質シルト

Vlb層:家屋部造成層 磨混砂質シルト

VII層:溝状遺構1(家屋部内)埋土

VIII層:溝状遺構2(家屋部周縁)埋土

IXa層:溝状遺構3(屋敷地内周縁)埋土1 Va層に相当するが水の影響を受け黒っぽく変色する。

IXb層:溝状遺構3(屋敷地内周縁)埋土2 IXa層と類似しているが、しまりが強く、地山ブロックを包含する。

IXc層:溝状遺構3(屋敷地内周縁)埋土3 水分を多く含み、しまりが弱く、水により変色する。

X層:北東小堤内側溝 埋土

11層:家屋部盛土

12a層:屋敷跡南東側盛土1

12b層:屋敷跡南東側盛土2

13層:屋敷跡北東側盛土(石積み)

14層:北側小堤

15a層:屋敷跡盛土外側溝(南東側)

15b層:屋敷跡盛土外側溝(北東側)

16層:クチャ

17層:マージ

第V-24表 平成26年度 基本層序

トレンチ名	壁面	層番号	基本層序
9	1・10 2・11・9 3・4・5 7, 8 12・13 14・15	1層 Va層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層	I層 II層 IIIa層 IVa層 IVb層 17層
	16北壁 17北壁		IVb層 IVb層
P03	1・2・3・4 5・6・7 8・9・10・11・12・13 11・14・15・16・17	1層 Va層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層	I層 II層 IIIa層 IVa層 IVb層 17層
	10北西壁 11北東壁		
8	1・2・3 5 6 7 8・9 10・11・12・13 14・15	1層 1層 Va層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層	I層 II層 IIIa層 IVa層 IVb層 17層
	12北東壁 13南東壁 14南西壁		
9	1・10 2・11・9 3・4・5 6 7, 8 12・13 14・15	1層 Va層 Vb層 — Vb層 Vb層 Vb層 Vb層	I層 II層 IIIa層 IVa層 IVb層 17層
	16北壁 17北壁		
11	1 2・3・4 5 6 7・8 9 11・12・13 13・15・16 17 18	1層 Va層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層	I層 II層 IIIa層 IIIb層 IVa層 IVb層 IVb層 IVb層 IVb層 IVb層
	18北壁 19東壁		
12	1 2・3・4 5 6 7 8 9・10・11 12	1層 Va層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層	I層 II層 IIIa層 IIIb層 IVa層 IVb層 IVb層 IVb層 IVb層
	20東壁 21南壁		
13	1 2 3 4・7 5・6・14・15 8 9・10・12 11・13 16・17	1層 Va層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層	I層 II層 IIIa層 IIIb層 IVa層 IVb層 IVb層 IVb層 IVb層 17層
	22北東壁 23南東壁		
30	1 2 3・4・5・6・7・8・9 10・11・12 13 15・16 17	1層 Vb層 Va層 Vb層 Vb層 Vb層 Vb層	I層 II層 IIIa層 IVa層 IVb層 IVb層 IVb層
	北東壁		
2	1 2 3 4・6 4・8 9 10・11 12	1層 Va層 Vb層 Vb層 Vb層 — Vb層 Vb層 Vb層	I層 IIa層 IVa層 IVb層 IVb層 — IVb層 IVb層 IVb層
	26南東壁 27南西壁		

※「—」は根掘乱等により詳細は不明。

第VI章 結語

今回は、普天間飛行場の東側において巡回道路の移設工事が予定されたことに伴い、当該地における埋蔵文化財の発掘調査を実施した。当該地は米軍のパトロール（管理用）道路が敷設されている地域ということもあり、これまで文化財調査がほとんどなされていない地域であった。そのため、平成 25 年度より現地において試掘調査を実施する予定であったが、基地内への入域許可がなかなか下りなかつたこと等から、平成 25 年度においては現地調査を実施せず、翌 26 年度に試掘調査を実施した。試掘調査は 58 箇所で実施する予定であったが、事前の伐開作業において宜野湾古集落の包蔵地内で戦前までの屋敷跡が比較的良好に残存していたため、屋敷跡一帯については試掘を取りやめしたことにより、試掘箇所は 54 箇所となった。試掘調査の結果、神山後原丘陵古墓群及び赤道渡呂寒原古墓群の縁辺部においてピットや落込み状遺構等が確認されたことに伴い、当該地周辺における緊急発掘調査を実施することとなった。

平成 26 年度の調査は、宜野湾古集落の屋敷跡等及び試掘調査時に目視で確認された赤道渡呂寒原古墓群の古墓が対象となった。屋敷跡等の調査をしたところ、屋敷廻いである盛土遺構及び、家屋部については、家屋内の造成後に壁や石敷きを設置していることが窺えた。また、家屋部で見られた盛土上石積みは一部しか残存していなかったが、地域の方の情報や同時期の遺跡等の状況から、当該地の遺構も石積みの隙間を土で塞ぐことで壁としたことが推察できる。なお、盛土や石積み等の壁を設けていることから、残存する家屋内が火を使う台所であった可能性も想定されたが、床面において焼土の集中や多量の炭などが見られなかつたことから、台所以外の空間であったことも検討する必要がある。屋敷地周縁のみならず、家屋部内外に溝状遺構が廻らされていることが確認された。この状況は、平成 18 年度に調査を行った赤道渡呂寒原屋取古集落の屋敷跡における溝跡の配置状況と類似するが、渡呂寒原屋取古集落については母屋や台所等の内部に溝跡が確認されていないという点で今回の調査状況と若干異なる。また、今回は瓦の出土数が少ないうえに、家屋部に伴う石柱の上端部に抉りが認められたことから石柱間で梁をわたし、垂木の上に茅葺きの屋根を設けたことが推察される。家屋の外側については、屋敷地内を見にくくするための目隠しとして、屋敷廻いとなる盛土遺構上部に竹を植えていたことが窺えた。屋敷地外に関して、道跡は戦後の造成や攢乱によってほとんどが壊されていたが、わずかに旧道の造成や溝跡などが確認されたのみで、その詳細を把握するに至らなかつた。また、畑跡については、地域の方の情報で 1970 年代ごろまでは比較的の自由に往来して黙認耕作を行っていたとのことであったが、現地にて地表面に畑の畝間が残存する状況が見られており、地域からの情報と合致していることが判明した。

赤道渡呂寒原古墓群の古墓については、一部で副葬品が残存しているのみで、文字資料を有す扇子等は確認されなかつた。しかし、古墓造成の過程で墓室内から造成し、続いて墓口及び墓庭を構築していることが把握でき、当該古墓群の一端を窺うことができた。

平成 27 年度は 1 ~ 3 地区に調査区を分割して調査を行ったところ、道跡と思われる遺構、畑跡に関わる遺構、古墓が認められた。1 地区では溝状遺構の軸に沿うように礫敷きが確認されていることから道跡の可能性が想定されたが、調査区を横断する状況での検出であったためその詳細は把握されなかつた。しかし、戦前の航空写真や地籍等により、調査区周辺にかつて道が通っていたことが確認されるため、検出された遺構が赤道シキロ一流域古墓群方面へと至る道跡で、トゥルックミチ（宜野湾市教育委員会 2012）であることが考えられる。なお、2 地区においても硬化面や多くの礫が検出されたこと及び各資料等から道跡を思

せる状況が見られたが、戦後の撤去などでは大部分は破壊されていることが把握された。痕跡に関わる遺構については、2地区において区画跡と思われる切土状の遺構が確認された。当該遺構は、東側の土地を切って段差を設け、遺構上部の肩にあたる軸上に石列を配している状況が認められており、また地籍とも概ね合致していることから土地境界の区画を示す意図で形成された遺構であることが考えられる。また、2地区では土坑も検出されている。2地区-1で確認された切り合い関係のある土坑からは沖縄産施釉陶器とアカムヌーが出土しているが、両土坑の埋土状況が類似し、かつ他の地点において検出されておらず、その用途の把握には至っていない。2地区-5で検出した土坑については、炭や焼土などの混入物があり、人為的に掘り込まれている遺構ではあるが、遺構内の埋土と遺構外の土に大きな違いが認められないことから、掘り込んだのち時間をおかずして埋め戻した可能性が考えられるが、当該遺構についてもその詳細を知り得ない。

宜野湾シリガーラ流域古墓群所在の古墓については、墓庭における調査を実施したところ、表土層以下は造成層であったが、複数回の造成などは見受けられず、造成層からの遺物も多くはなかった。なお、今回調査対象から外れた周辺の古墓は亀甲墓などに意匠されていたが、対象となった当該古墓は掘込み墓の状態であり、一部崩れていたことから、比較的早い段階には管理されなくなり、その存在が忘れられてしまった可能性が考えられる。

以上、巡回道路移設工事予定地における発掘調査の報告を行ったが、今回は道路整備に伴う調査とあってトレンチ上の調査区となり、遺構の詳細をすべて明らかにできなかった。しかしながら、限られた調査区の中で近代以前の痕跡を確認できることについては、今後当該地点一帯の埋蔵文化財を把握し、保存していくうえで意義のある調査であったといえる。将来的に基地返還に伴う開発協議も少なからず出てくることになると思われるが、文化財保護の精神にのっとり、地域にとって重要な文化財の保護・活用が図られることを基本としたい。

参考・引用文献

- 沖縄県教育庁文化財課編 2010『普天間飛行場内遺跡地図（中間報告）』沖縄県教育委員会・宜野湾市教育委員会
- 宜野湾市教育委員会 2012『ぎのわんの地名 - 内陸部編 -』（市民民俗芸能調査報告書）
- 宜野湾市教育委員会 2005『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』（宜野湾市文化財調査報告書第36集）
- 宜野湾市教育委員会 2006『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』（宜野湾市文化財調査報告書第38集）
- 宜野湾市教育委員会 2007『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』（宜野湾市文化財調査報告書第39集）
- 宜野湾市教育委員会 2009『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』（宜野湾市文化財調査報告書第44集）
- 宜野湾市教育委員会 2013『基地内埋蔵文化財調査報告書6』（宜野湾市文化財調査報告書第50集）
- 宜野湾市教育委員会 2014『宜野湾市文化財情報図〔平成25年度版〕』（宜野湾市文化財保護資料第72集）

報告書抄録

ふりがな	ふてんまひこうじょうちくまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ						
書籍	普天間飛行場地区埋蔵文化財発掘調査報告書						
副題名	平成25~27年度 巡回道路移設工事予定地における埋蔵文化財緊急発掘調査事業 宜野湾古集落・宜野湾シリガーラ流域古墓群・神山後原丘陵古墓群・赤道渡呂寒原古墓群・赤道シキロー流域古墓群						
巻次	一						
シリーズ名	宜野湾市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第55集						
編著者名	長濱 健起、池原 悠貴						
発行機関	宜野湾市教育委員会						
所在地	郵便番号901-2203 沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号 TEL098-893-4430						
発行年月日	2017(平成29)年3月24日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
普天間飛行場内巡回道路移設工事予定地試掘調査	沖縄県宜野湾市宜野湾、神山、赤道、中原	市町村 遺跡番号	26° 16' 17. 8"	127° 45' 54. 7"	20140926 20150330		巡回道路移設工事予定地における試掘調査54ヶ所
ぎのわんこしゅうらく 宜野湾古集落	沖縄県宜野湾市宜野湾	472051 261	26° 16' 4. 1"	127° 45' 36. 7"	20150119 20150330	450m ²	巡回道路移設工事予定地に伴う記録保存調査
あかみちとるがんばるこぼぐん 赤道渡呂寒原古墓群赤	沖縄県宜野湾市赤道	293	26° 16' 29. 9"	127° 46' 11. 9"			
ぎのわんしおらりゅういきこぼぐん 宜野湾シリガーラ流域古墓群	沖縄県宜野湾市宜野湾、神山	272	26° 16' 8. 8"	127° 45' 43. 5"			
かみやまくしばるきゅうりょうこぼぐん 神山後原丘陵古墓群	沖縄県宜野湾市神山	287	26° 16' 19. 3"	127° 45' 57. 2"	20150917 20160122	1,230m ²	
あかみちしきろーりゅういきこぼぐん 赤道シキロー流域古墓群赤	沖縄県宜野湾市赤道	294	26° 16' 26. 4"	127° 46' 5. 9"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
宜野湾古集落	集落跡	近世～近現代	ピット、溝状遺構、土坑、土坑、道跡	沖縄産陶器、本土産陶磁器、レンガ、キセル、錢貨等	戦前までの屋敷跡(家屋部分)の一部が残存。		
赤道渡呂寒原古墓群	墓		掘込墓	沖縄産施釉陶器、簪等			
宜野湾シリガーラ流域古墓群	墓		掘込墓	厨子(蔵骨器)、沖縄産陶器、本土産陶磁器等	墓室に厨子10基程が残存。その奥に人骨を確認。		
神山後原丘陵古墓群	墓		ピット、溝状遺構、土坑、道跡	沖縄産陶器、本土産陶磁器、アカムヌー等			
赤道シキロー流域古墓群	墓		ピット、溝状遺構、土坑、道跡	沖縄産陶器、本土産陶磁器等			
要約	本報告は、平成25~27年度に実施した普天間飛行場内における巡回道路移設工事に伴う発掘調査の成果をまとめたものである。調査によって、近世～近現代の屋敷跡、畑跡、古墓などが検出され、当該期における調査区周辺地域の歴史的状況の一端が窺えた。						

文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権(発行者)の承諾なく、この報告書を複製して利用できます。
なお、利用にあたっては、出典を明記してください。

宜野湾市文化財調査報告書 第55集

普天間飛行場地区埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 25 ~ 27 年度

巡回道路移設工事予定地における埋蔵文化財緊急発掘調査事業

宜野湾古集落

宜野湾シリガーラ流域 古墓群

神山後原丘陵 古墓群

赤道渡呂塞原古墓群

赤道シキロー流域 古墓群

発行年 2017(平成 29)年 3月 24日

編 集 沖縄県宜野湾市教育委員会

住 所 〒901-2203

沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号

TEL 098-893-4430

印 刷 株式会社 ちとせ印刷

TEL 098-879-5814